

鳥羽離宮跡・下鳥羽遺跡

2002年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

鳥羽離宮跡・下鳥羽遺跡

2002年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しております。また、平安京遷都以来今日に至るまで都市として永々と生活が営まれてきており、各時代の生活跡が連綿と重なり合っています。都であるゆえに、そこから発見されるその一つ一つは、日本の歴史を語るうえで欠くことのできないものとなっています。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした遺跡の発掘調査を通して京都の歴史の解明に取り組んでおります。その成果を市民の皆様幅広く公開し活用いただけるよう進めていくことが研究所の責務と考えております。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、出土遺物の小・中学校や公的施設での貸出展示、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところであります。

さて、当研究所では従来各年度毎で報告してまいりました「京都市埋蔵文化財調査概要」を改め、平成13年度調査分より各調査箇所毎に1冊の報告書として発刊しております。その第8冊目として、このたび京都市道高速道路2号線（油小路線）建設に伴います鳥羽離宮跡・下鳥羽遺跡の発掘調査の成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援をたまわりました関係者各位に厚くお礼ならびに感謝を申し上げる次第です。

平成14年11月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

例 言

- | | |
|------------|--|
| 1 遺 跡 名 | 鳥羽離宮跡・鳥羽遺跡・下鳥羽遺跡 |
| 2 調査所在地 | 第3工区：京都市伏見区竹田真幡木町～竹田内畑町地内
第4工区：京都市伏見区竹田浄菩提院町・竹田踞川町地内
第5工区：京都市伏見区竹田松林町・下鳥羽東芹川町地内 |
| 3 委託者及び承諾者 | 第3工区：飛島・株木建設工事共同企業体
第4工区：鉄建・白石建設工事共同企業体
第5工区：株式会社 浅沼組 |
| 4 調査期間 | 第3工区：2001年10月4日～2001年12月3日
第4工区：2001年8月3日～2001年11月28日
第5工区：2001年8月6日～2001年11月17日 |
| 5 調査面積 | 第3工区：277m ² 第4工区：984m ² 第5工区：806m ² |
| 6 調査担当職員 | 第3工区：尾藤徳行・前田義明
第4工区：吉村正親・尾藤徳行・能芝妙子・宮下則子
第5工区：南出俊彦・小谷 裕・小森俊寛 |
| 7 使用地図 | 京都市都市計画局発行の地形図（1：2,500）「城南宮・下鳥羽」を調整して使用した。 |
| 8 使用方位・座標値 | 使用測地系 日本測地系（改正前）平面直角座標系（ただし、単位（m）を省略した） |
| 9 使用標高 | T.P.：東京湾平均海面高度（座標および標高は、京都市遺跡測量基準点を使用した） |
| 10 遺構番号 | トレンチごとに通し番号を付し、遺構種類を前に付けた。 |
| 11 遺物番号 | 工区ごとに挿図の順に通し番号を付した。 |
| 12 掲載写真 | 村井伸也・幸明綾子 |
| 13 作成担当職員 | 第3工区 尾藤徳行・吉村正親
第4工区 吉村正親
第5工区 南出俊彦 |



（調査地点図）

目 次

鳥羽離宮跡145次調査（第3工区）

1. 調査経過	1
2. 遺 構	2
(1) 19トレンチ	2
(2) 20トレンチ	3
3. 遺 物	4
(1) 石 器	4
(2) 土器・瓦	5
(3) 柿 経	6
4. ま と め	6

鳥羽離宮跡146次調査（第4工区）

1. 調査経過	8
2. 遺 構	9
(1) 30トレンチ	9
(2) 31トレンチ	11
(3) 32トレンチ	12
(4) 33トレンチ	15
(5) 34トレンチ	15
(6) 35トレンチ	16
3. 遺 物	16
(1) 30トレンチ	16
(2) 31トレンチ	22
(3) 32トレンチ	22
(4) 33トレンチ	23
(5) 34トレンチ	24
(6) 35トレンチ	24
4. ま と め	24
(1) 30トレンチ	24
(2) 31トレンチ	25
(3) 32トレンチ	25
(4) 33～35トレンチ	25

下鳥羽遺跡（第5工区）

1. 調査経過	27
2. 遺構・遺物	28
(1) 46トレンチ	28
(2) 47トレンチ	29
(3) 48トレンチ	29
(4) 49トレンチ	30
(5) 50トレンチ	31
3. まとめ	35

図 版 目 次

図版1	調査位置図	調査位置図（1：10,000）
図版2	遺構	1 第3工区 19トレンチ全景（北から） 2 第3工区 20トレンチ全景（西から）
図版3	遺構	1 第4工区 30トレンチ第1面全景（西から） 2 第4工区 30トレンチ第2面全景（東から）
図版4	遺構	1 第4工区 30トレンチ地業跡断面（西から） 2 第4工区 30トレンチSK3（南から）
図版5	遺構	1 第4工区 31トレンチ全景（西から） 2 第4工区 32トレンチ第1面全景（北から）
図版6	遺構	1 第4工区 32トレンチ鬼瓦出土状況 2 第4工区 32トレンチSG2西岸馬骨出土状況
図版7	遺構	1 第4工区 32トレンチ馬骨出土状況 2 第4工区 33トレンチ全景（西から）
図版8	遺構	1 第4工区 34トレンチ全景（北から） 2 第4工区 35トレンチ全景（東から）
図版9	遺構	1 第5工区 46トレンチ全景（東から） 2 第5工区 47トレンチ全景（北から）
図版10	遺構	1 第5工区 48トレンチ全景（北から） 2 第5工区 49トレンチ全景（北から）
図版11	遺構	1 第5工区 50トレンチ第1面全景（北から） 2 第5工区 50トレンチ第2面全景（北から）

図版12 遺物	1 第3工区 20トレンチ出土石製品
	2 第3工区 19トレンチ出土柿経
図版13 遺物	第4工区出土軒丸瓦(30トレンチ:26・27・29~33、 32トレンチ:34)
図版14 遺物	第4工区出土軒平瓦(30トレンチ:35~37・39、 32トレンチ:44・45)

挿 図 目 次

図1	第3工区調査位置図(1:5,000)	1
図2	第3工区調査前全景	2
図3	第3工区調査風景	2
図4	19トレンチ平面図(1:200)	2
図5	19トレンチ南壁断面図(1:100)	3
図6	20トレンチ平面図(1:200)	3
図7	20トレンチ南壁断面図(1:100)	3
図8	20トレンチ出土石器実測図(1:4)	4
図9	第3工区出土遺物実測図(1:4)	5
図10	19トレンチ出土柿経(1:1)	6
図11	第4工区調査位置図(1:5,000)	8
図12	第4工区調査前全景	9
図13	第4工区調査風景	9
図14	30トレンチ平面図(1:250)	10
図15	30トレンチ南壁断面図(1:100)	11
図16	31トレンチ平面図(1:250)	11
図17	31トレンチ北壁断面図(1:100)	12
図18	32トレンチ平面図(1:250)	13
図19	32トレンチ東壁断面図(1:100)	14
図20	33トレンチ平面図(1:250)	14
図21	34トレンチ平面図(1:250)	14
図22	33トレンチ北壁断面図(1:100)	15
図23	34トレンチ東壁断面図(1:100)	15
図24	35トレンチ平面図(1:250)	15
図25	35トレンチ北壁断面図(1:100)	16
図26	第4工区出土遺物実測図(1:4)	17
図27	第4工区出土軒丸瓦拓影・実測図(1:4)	18

図28	第4工区出土軒平瓦拓影・実測図(1:4)	19
図29	30トレンチ出土特殊平瓦拓影(1:4)	20
図30	30トレンチ出土記号瓦拓影(1:4)	21
図31	32トレンチ出土鬼瓦拓影(1:4)	21
図32	32トレンチ出土木製品実測図(1:4)	22
図33	第5工区調査位置図(1:5,000)	27
図34	第5工区調査前全景	27
図35	第5工区調査風景	27
図36	46トレンチ平面図(1:200)	28
図37	46トレンチ西壁断面図(1:100)	28
図38	47トレンチ平面図(1:200)	29
図39	47トレンチ西壁断面図(1:100)	29
図40	48トレンチ平面図(1:200)	30
図41	48トレンチ北壁断面図(1:100)	30
図42	49トレンチ平面図(1:200)	31
図43	49トレンチ西壁断面図(1:100)	31
図44	50トレンチ平面図(1:200)	32
図45	50トレンチ西壁断面図(1:100)	32
図46	第5工区出土遺物実測図(1:4)	34
図47	46トレンチ出土軒丸瓦	34
図48	50トレンチ出土石帯	34

表 目 次

表1	第3工区遺構概要表	4
表2	第3工区遺物概要表	5
表3	第4工区遺構概要表	16
表4	第4工区遺物概要表	23
表5	第5工区遺構概要表	33
表6	第5工区遺物概要表	33

鳥羽離宮跡145次調査（第3工区）

1. 調査経過

調査地は、京都市伏見区竹田真幡木町から竹田内畑町地内に所在する（第3工区）。平安時代後期の鳥羽離宮跡にあたり、今回は145次調査となる。また、調査地南方は縄文時代から飛鳥時代の鳥羽遺跡にあたる。新油小路通建設に先立つ発掘調査などで多くの成果があがっている地区にある。近くでは、鳥羽離宮跡関連の遺構・遺物だけでなく弥生時代の遺構・遺物が検出されている。調査地南方の油小路通を渡る歩道橋付近の鳥羽離宮跡71次調査¹⁾や、インターチェンジ付近の90次調査²⁾で遺構・遺物が検出され、30次調査³⁾では水差型土器（弥生第 様式）35A次調査⁴⁾では石包丁、64次調査⁵⁾では磨製石剣が出土している。

今回の工区は、阪神高速道路公団による京都市道高速道路2号線（油小路線）竹田第3工区下部工事である。名神高速道路から南へ順番に19から29までの橋脚があるが、21以南については新油小路拡幅時に調査済みのため、未調査分の19・20の橋脚部分だけが調査対象となった。

まず、調査区が新油小路通の中央分離帯の中であるので、共同企業体によって安全設備の設置や、分離帯の植栽移植を行った。調査に先立ち、2001年10月4日に試掘調査を実施し、土質や出水状態などを調べた。10月9日からプレハブ設置などの準備を行った。

20トレンチは、10月16日から重機掘削と残土搬出、10月22日から遺構検出・遺物採集作業、

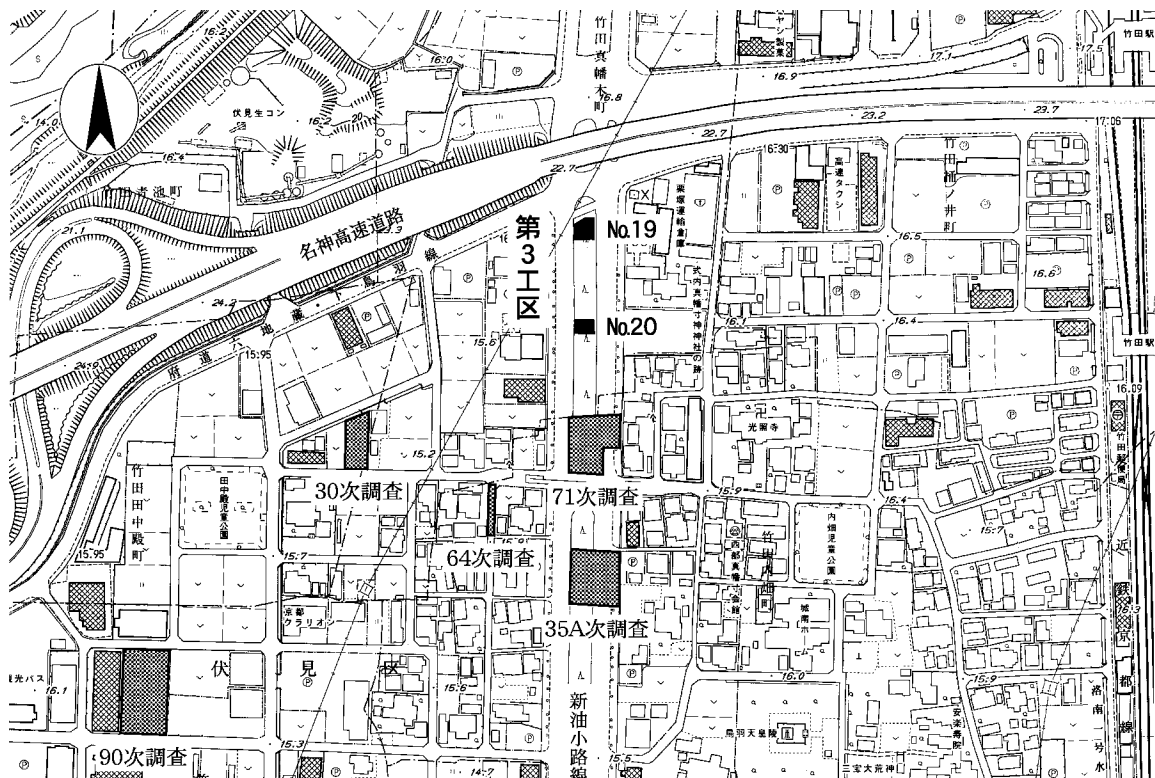


図1 第3工区調査位置図（1：5,000）



図2 第3工区調査前全景



図3 第3工区調査風景

11月5日に写真撮影、実測作業などを行った。引き続き調査を進めようとしたが、大量の湧水のため断念し、11月9日に調査を終了した。

19トレンチは、11月12日から重機掘削・残土搬出、11月19日から遺構検出・遺物採集作業、11月27日に写真撮影、実測作業などを行った。湧水のため調査は断念し、12月3日に埋め戻して調査を終了した。

北側の19トレンチは、南北約15m、東西約13.5mの五角形で約150m²、南側の20トレンチは、南北約10m、東西約13mの長方形で約130m²ある。

調査の結果、近世から中世の耕土層や包含層を検出し、少量の遺物を採取した。出土遺物の中には近世から中世の遺物に混じって、弥生時代や平安時代の遺物も確認できた。20トレンチでは弥生時代の石剣の一部や石器の破片、19トレンチでは中世以降の数点の柿経が出土した。しかし、鳥羽離宮跡や鳥羽遺跡に関する明確な遺構は検出できなかった。

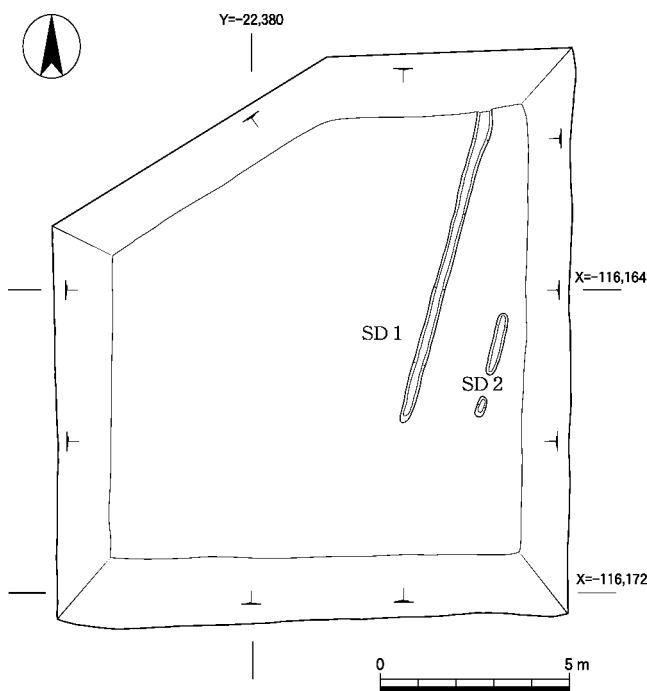


図4 19トレンチ平面図(1:200)

2. 遺 構

(1) 19トレンチ

基本土層は、標高16.2mの道路面下に1.0mの盛土があり、標高15.2mにて厚さ0.2mの耕土・床土層の1・2層がある。その下の厚さ0.05~0.2mの4~6層からは、あまり遺物は見られなかった。厚さ0.15m前後の7・8層からは13世紀と16世紀の遺物が少量出土した。標高14.5m以下の粘土層の9層は、東壁では14.6mと高くなり、16世紀の多くの遺物が出土した。その下の10層は東が高く、

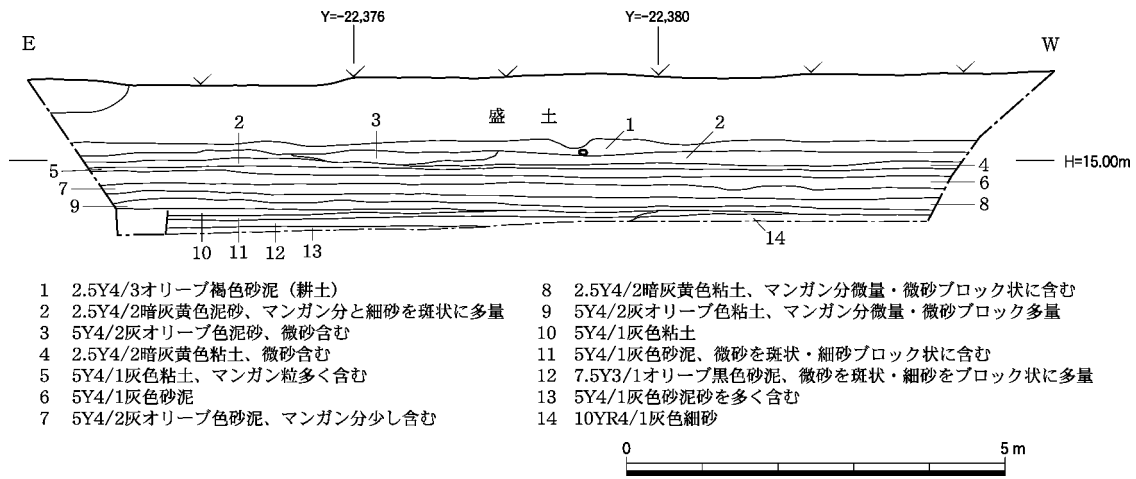


図5 19トレンチ南壁断面図(1:100)

西側で見られなくなる粘土層であるが、調査区東端の標高14.5mで柿経などが出土した。さらに下層は、砂泥・砂層の11~14層となるが、木片が見られる程度であった。その後、断ち割り部分から湧水があり、無遺物層の確認はできず、調査を終了した。

SD1・2は標高約14.5mの8層上面にて検出し、13世紀と16世紀の遺物が少量出土した。8層も同時代の遺物を含んでおり、室町時代の耕作用の湿気抜き溝と考える。

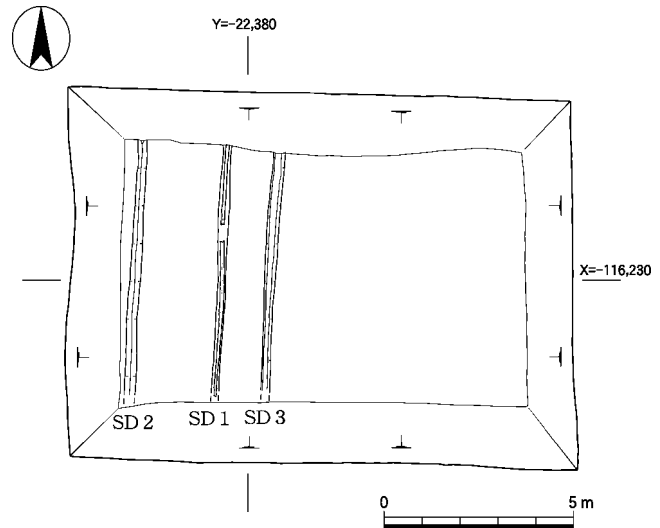


図6 20トレンチ平面図(1:200)

(2) 20トレンチ

基本土層は、標高15.9mの道路面下に1.1mの盛土があり、その下に厚さ0.2mの近代の耕土・床土層の1・2層がある。その下には、遺物の多い厚さ0.1~0.15mの粘土層の3~7層が続く。その下層は、

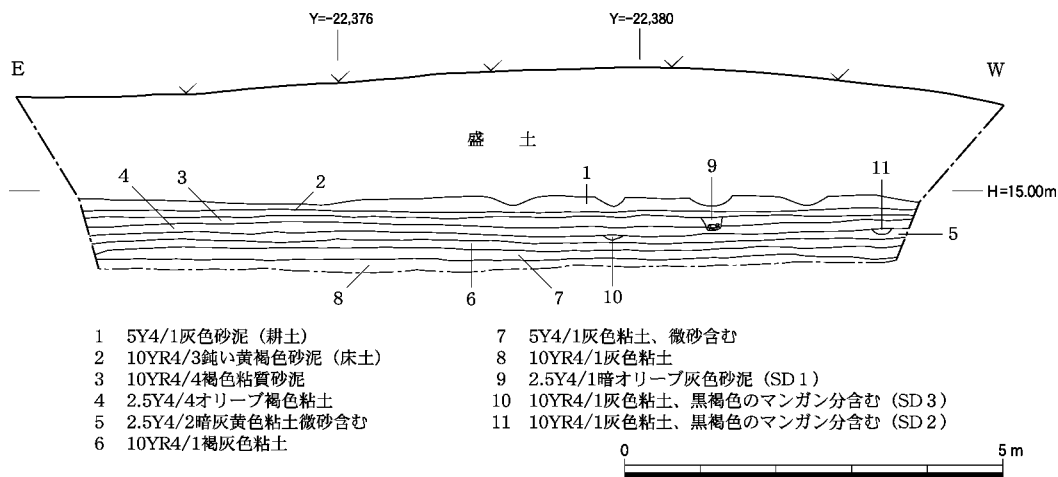


図7 20トレンチ南壁断面図(1:100)

表1 第3工区遺構概要表

時代	遺構	
	No.19トレンチ	No.20トレンチ
室町時代	SD1・2	SD2・3
江戸時代		SD1

出水の危険があり、一部で断ち割り調査を実施した。その結果、標高14.1m以下は遺物の少ない厚さ0.1～0.2mの微砂や腐植土が多く混じるきれいな粘土層の8～11層が続くことがわかった。10層からは平安時代の土師器皿が出土した。しかし、11層からの大量の湧水によって4層まで水没した

ため、無遺物層の確認ができないまま、調査を終了した。

SD1は、標高約14.7mの3層上面にて検出した。幅0.25m、深さ0.2m程の規模で、南北の調査区外に続いている。埋土は2層に分けられ、下層は底部に割れた太い竹が1本あり、その周囲には1～5cm大の小石が詰まっていた。3層が耕土の時の湿気抜きと考えられる。遺物は磨滅しているものが多く、染付もあり近世のものとする。

SD2・3は、標高約14.5mの5層上面で検出した。幅0.3m、深さ0.1m程の規模で、南北の調査区外へ続いている。出土遺物から、どちらも室町時代のものとする。

3. 遺物

コンテナに8箱出土し、大部分は土器類で6箱、木器類が2箱であった。

弥生時代の遺物は、20トレンチの各時代の土層から混入して出土した。特に、4・5層の室町時代の包含層から多く出土している。磨製石剣や石錐の破片、製作途中と思われる石鏃片や石包丁片などが出土している。

平安時代の遺物は少なく、磨滅したものが各土層から出土した。磨滅の少ないものは、10・11世紀頃と推定される土師器皿が、20トレンチの断ち割りした10・11層から出土している。12世紀に推定できる土師器皿も20トレンチの8層から出土した。

鎌倉時代の遺物は、小片で磨滅している土師器や瓦器が多く、20トレンチ4層から出土した瓦器碗は13世紀頃のものと思われる。

19トレンチSD1からは、13世紀頃の瓦器碗と共に、16世紀頃の土師器皿が出土した。

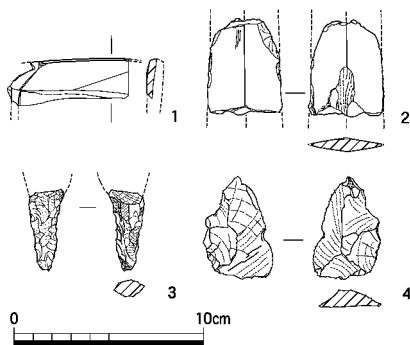


図8 20トレンチ出土石器
実測図(1:4)

室町時代の遺物は、19トレンチ10層から法華経の柿經の断片数点が、14～16世紀頃と思われる土師器皿、瓦器釜、古瀬戸皿などと共に出土した。

江戸時代の遺物は、19トレンチの6層、20トレンチの4層より上層から出土している。

(1) 石器

いずれも20トレンチの各時期の包含層中から出土したもので、客土中に混入していたものと思われる。図8-4は

三角形をした石鏃の未成品でサヌカイト製である。1は石包丁の小片である。刃部はなく、背部と側面が保たれていた。側面の溝は2個を同時に粗造りし切り離す技法によると思われる。3は石錐でサヌカイト製である。2はやや幅広の石剣片で、幅5.0cm、長さ5.0cm以上、厚さ0.7cmで、硬質の粘板岩製である。弥生時代中期の頃のものであろう。

(2) 土器・瓦

19トレンチから出土した遺物は(図9-6・8・9・11・15・16) 20トレンチから出土したものは(5・7・10・12~14)である。5は灯明皿としての炭化部が見える土師器小皿である。7も一段ナデ返しの土師器中皿で、いずれも13世紀頃と考える。6は16世紀の土師器皿、8・9は青磁椀で龍泉窯系のものである。10は剣頭文の小型軒平瓦で、平安時代後期のものである。11・12は瀬戸大窯期の陶器段皿で、灰釉がかかる。13は瓦器椀小片で、やや器壁が厚く仕上

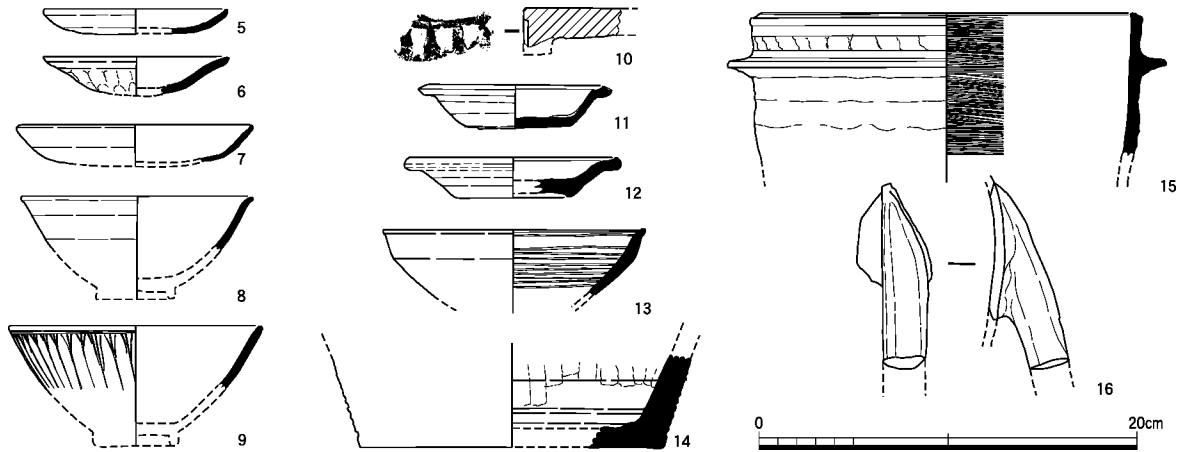


図9 第3工区出土遺物実測図(1:4)
19トレンチ: 6・8・9・11・15・16、 20トレンチ: 5・7・10・12~14

表2 第3工区遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
弥生時代	弥生土器、石器	7箱	石器4点	1箱	1箱
平安時代後期	土師器、瓦		軒平瓦1点		
鎌倉時代	土師器、瓦器		土師器2点、瓦器1点		4箱
室町時代	土師器、瓦器、磁器、木筒、箸、木製品		瓦器2点、青磁2点、柿経12点		
江戸時代	土師器、陶器、染付	2箱	土師器1点、陶器2点	0箱	2箱
時期不明	土師器、陶器、磁器、竹		須恵器1点		
計		9箱	28点(1箱)	1箱	7箱

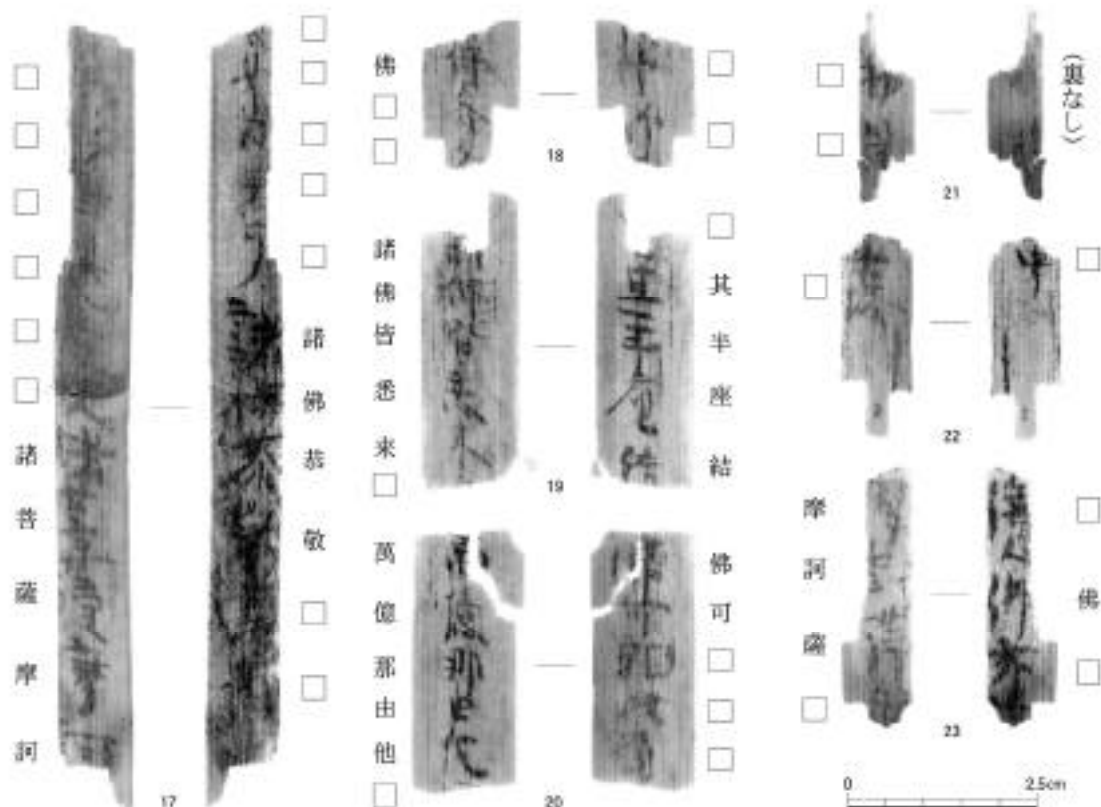


図10 19トレンチ出土柿経（1：1）

がっており、「く」字に曲がり、口縁に凹線がしっかり入る楠葉型である。立ち上がりはもう少しふっくらとした復元になる。13世紀中葉頃と思われる。14は甕か長胴の壺型になる須恵器で、時期は不明である。15・16は瓦器羽釜で、全面がよく炭化されている。16は足付羽釜の足であり、いずれも14世紀頃のものと思われる。

（3）柿 経

19トレンチの10層から柿経断片が10数点がたまって出土した。最大で幅は2.7cm、長さ20cm以上、厚さ1～2mmを測る。字が残存する主なものを図10に示した⁶⁾。17には「諸菩薩摩訶」「諸佛恭敬」、18には「佛」「」、19には「諸佛皆悉來」「其半座結」、20には「萬億那由他」「佛可」、23には「摩訶薩」「佛」などが書かれている。これらの語句は、法華経の経文中に見られるものである。

4.まとめ

当第3工区南方の第4工区では、近世以前の旧鴨川の河床・流路が確認されている。そのため、当地の東側を南行して第4工区の33トレンチ以南で西に曲がっていた旧鴨川が、桃山時代に付け替えられて、現在のように、第3工区の北方で西へ曲がって桂川に合流するようになったことがわかった。このような地形の中、現道路面は、北側の19トレンチで16.2m、南側の20トレ

ンチでは15.9mと南へ低くなり、旧地形の耕土面も 19トレンチは15.1m、 20トレンチは14.9mと南へ低くなっている。しかし、室町時代の包含層は、 19トレンチ9・10層は14.5m、 20トレンチ4・5層も14.5mとほとんど同レベルである。

これらのことから、調査区は旧鴨川の西岸に位置し、弥生時代や平安時代の中期、末期には湿地状のままであったことがわかった。包含層の土質は、流路のような砂礫と異なり湿地状の粘土層が多く、また、石剣などの弥生時代や平安時代の遺物には、あまり磨滅していないものがあることから、調査区の近くの各時代の遺構や包含層の土を客土して、耕作土としたものと考えられる。鳥羽離宮が作られた頃にも湿地状で耕作されていたかは明確ではないが、室町時代以降には、そのような耕作土が湿地状で排水が悪いため 19トレンチSD 1・2、 20トレンチSD 1～3のような湿気抜きの暗渠を作って水田にしたのであろう。

今回の調査の結果、平安時代中期、室町時代の包含層を検出し、弥生時代や平安時代の遺物も出土したが、鳥羽遺跡や鳥羽離宮跡の遺構は確認できなかった。また、湧水が多く、調査できた最下層でも平安時代の湿地状の包含層までであり、無遺物層までの調査が行えなかった。しかし、磨滅の少ない遺物も見られることから、周辺には遺構の存在が十分に想定できるものである。

註

- 1) 木下保明・本 弥八郎・長宗繁「第71次調査」『昭和56年度 京都市埋蔵文化財調査概要（発掘調査編）』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1983年
- 2) 長宗繁一・前田義明「第90次調査」『昭和58年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1985年
- 3) 「第30次（田中殿）発掘調査」『鳥羽離宮跡 国庫補助による発掘調査概要』昭和52年度 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1978年
- 4) 「第35次（東殿）発掘調査」『鳥羽離宮跡 区画整理道路予定地内発掘調査概要』昭和52年度 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1978年
- 5) 「第64次発掘調査」『鳥羽離宮跡 区画整理道路予定地内発掘調査概要』昭和54年度 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1981年
- 6) 釈文作成については、西山良平京都大学教授にお願いした。

鳥羽離宮跡146次調査（第4工区）

1. 調査経過

調査地は、京都市伏見区竹田浄菩提院町・竹田踞川町に所在し、新油小路通の新城南宮道からワコールウィング本部前までの中央分離帯内に位置する（第4工区）。現在の景観では当調査区の北側に白河天皇成菩提院陵・鳥羽天皇安楽寿院陵・堀河天皇安楽寿院などの陵墓や、安楽寿院・北向山不動院などの鳥羽離宮の遺構が現存する。その一方、当調査区東西周辺では城南宮と田中宮町に陵墓参考地がある他はマンションや工場・田畑が中心である。

この地に京都市道高速道路2号線（油小路線）が建設される事となり、建設工事に先立って未調査のまま残されていた中央分離帯部分を発掘調査する事となった。橋脚間は工事による遺跡破壊はなかったので、調査は高架道路の橋脚にあたる部分で実施する事とした。

今回の調査は鳥羽離宮に関連する遺構の確認と中世以降の遺跡の変遷を探ることを目的とした。

調査は、新城南宮道から城南宮道の間北側から 30・31トレンチを、城南宮道からは 32～35トレンチをあける事とした。30トレンチは東西約10m・南北約14m、31トレンチは東西約14m・南北9m、32トレンチは東西約14m・南北約14m、33トレンチは東西約15m・南北約14m、34トレンチは東西約13m・南北約15m、35トレンチは東西約14m・南北約5mに設定した。

調査の結果、30～32トレンチからは平安時代後期から鎌倉時代前期にかけての鳥羽離宮に関

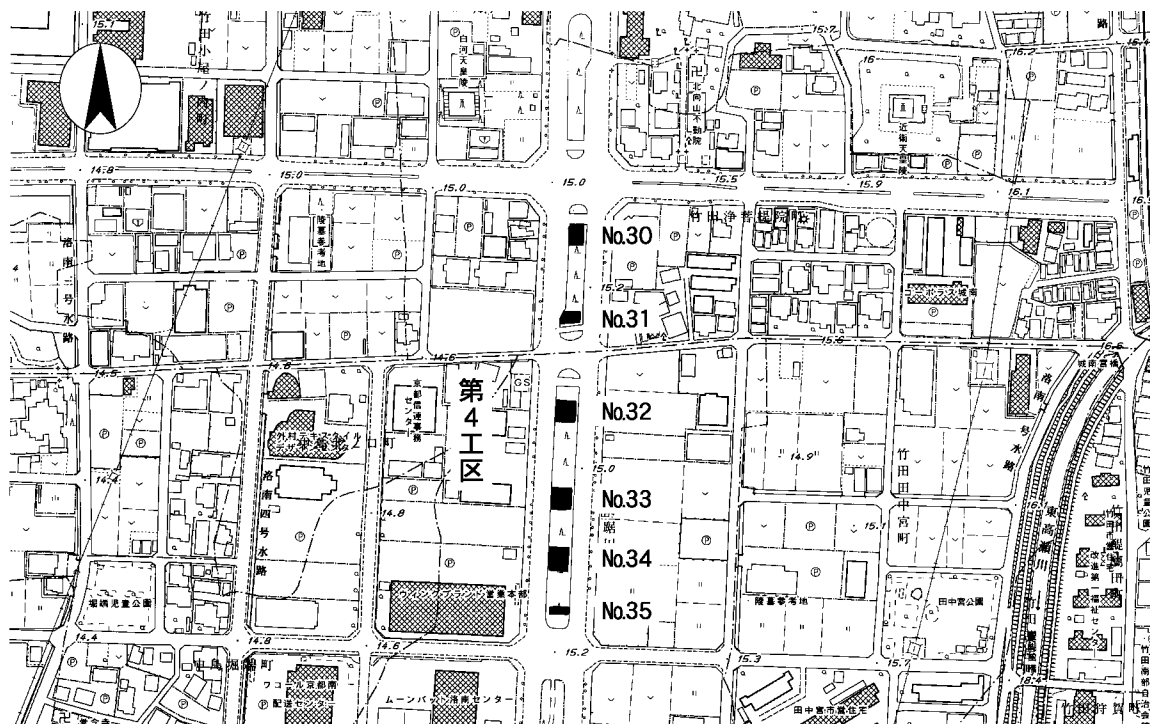


図11 第4工区調査位置図（1：5,000）



図12 第4工区調査前全景



図13 第4工区調査風景

連する建物の地業と、溝・池が検出された。一方、33～35トレンチは近世になって水田化されるまで旧鴨川の河床の一部である事が確認された。これらの写真撮影や実測などの記録、さらに下層遺構の調査・記録作成を行った。

2. 遺 構

各トレンチとも現代盛土層の下に近世の水田の床土層が検出された。そのため重機で水田の床土層を除去し、その下の面から遺構検出する事とした。

(1) 30トレンチ

現地表下1mまではトレンチ全面に攪乱を受けていた。この攪乱土は近隣地域からの持ち込み土と思われる、平安時代後期から鎌倉時代前期の土師器片が多く混入していた。またトレンチ北端で1.5mまで攪乱を受けていた。そのため全面清掃した後、1.8mまでトレンチ西端と南端を断ち割った。その結果、標高14m付近から石敷き面と思われる建物地業の痕跡が確認されたため、その面まで全面的に掘り下げ以下を調査した。地業の積み上げは大きく3面確認した。

第1面

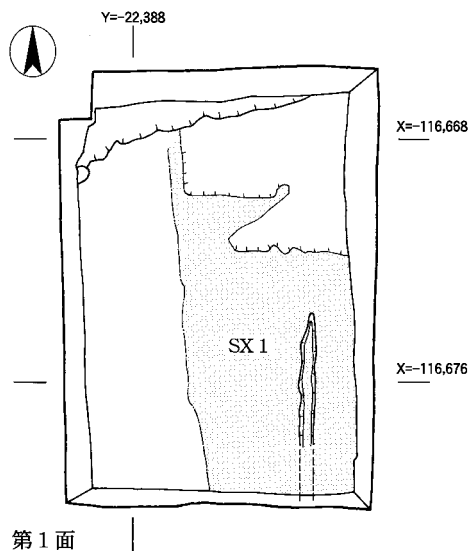
トレンチ南西端で、12世紀末～13世紀初期代の土師器片を多量に含む包含層が西に下るように広がっている事が確認された。SD2の遺物と同時期である。

SX1 石敷き地業は、トレンチ東半・南半に約5～10cm程度の自然石と瓦を中心に築造されていた。東半の南北ラインはやや密集するものの、南半はまばらに点在するのみである。南端に約20～30cm大の丸い礫が検出されたものの、その他は小礫のみである。他の鳥羽離宮跡の検出された石敷き地業・石積み地業のようにびっしりと石が入る形ではなかった。石敷き面の幅は、東西約1～2mほどで、石敷きの外郭は、堅い粘土・砂泥層、内郭は砂層である。

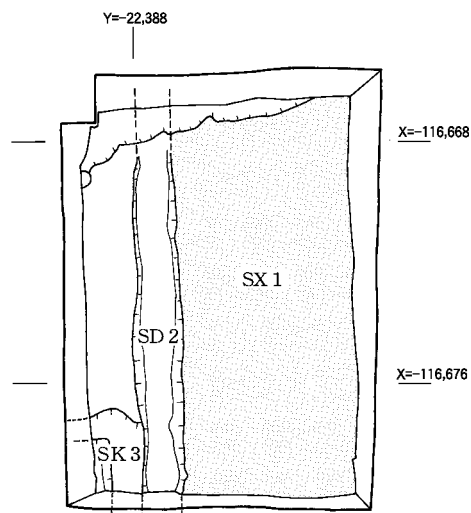
SD2の上に石敷き面がある事から、13世紀初頭以後の遺構面である。

第2面

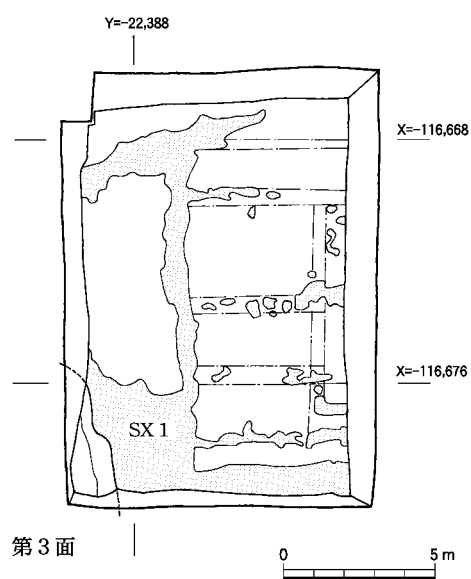
第1面の約20cm下で確認された。



第1面



第2面



第3面

図14 30トレンチ平面図(1:250)

SX 1 石敷き面は南半に密集し、1面に比べてやや大きめの礫が入るものの、配置はまばらなままである。またSD 2 掘削時に南北ラインの石敷き面は削平されたものと思われる。

SD 2 ほぼ南北方向で流れていた。東西幅は1.3～1.5m、深さは0.3m前後で安定している。東肩・西肩・底部とも砂泥層・砂礫層で強く締まるなど規格的に築造されていた。また溝の中からは土師器や瓦器・瓦片を中心とし、石や杭・松の珠果・馬の骨(歯)が多量に出土した。また断面観察の結果、一度溝が埋まった後、小規模な形で掘り返されていた。この溝は遺物から12世紀後半に築造され、13世紀初頭には埋没した事が確認された。

SK 3 土師器包含層の下にあり、瓦を主体とする土壌が溝状遺構と思われる。瓦は上層に多く、下層にいくほど少なくなる。完形品が少ないことから、破壊されて不要になった瓦や凝灰岩礫などを一括して廃棄したものと思われる。出土した瓦を検討したところ、平安時代後期(院政期)のものが主体である。ただし12世紀後半代の瓦器椀や土師器皿片が伴うことから、その時期の土壌である。SK 3の広がりを確認するためトレンチ西側を拡張したところ、溝状遺構が確認された。ただし遺物は全く出土しなかったため、時期は不明である。

SD 2・SK 3の遺物は12世紀後半代を中心とし、13世紀初頭までのものであった。

第3面

第2面の約40cm下で確認された。

SX 1 石敷き面は、約10cm大の自然石を中心に、南半の一部で粘土ブロックに囲まれて確認された他はほとんど見られない。その代わりに、南北2mの単位で灰色の大小の粘土ブロックが砂層まで掘り込まれ、仕切られていた。この事から湿地状の砂泥層を除去し、堅い泥土層まで掘り下げた後、川砂・小礫を入れて不整地を平坦にした後、粘土ブロックと石敷き地業によって地固めしたものと思われる。

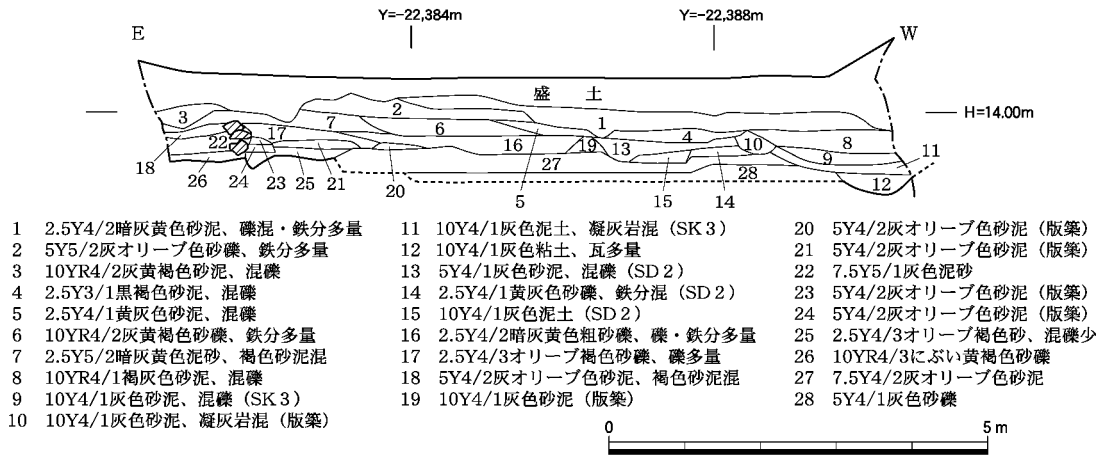


図15 30トレンチ南壁断面図 (1 : 100)

なお、図示してはいないが、トレンチ南部から断ち割り、最下層と思われる標高約13m近くで暗灰色砂泥を検出した。これは鳥羽離宮以前に存在していた沼地・湿地状の跡と思われる。

遺物が少ないため明確な時期を特定する事はできないが、断ち割り最下層から12世紀前半～中頃の瓦器椀が出土しているので、その頃の遺構面と思われる。

(2) 31トレンチ

現地地表下180cmで湧水が激しく、トレンチ南半の調査に到らなかった。また、トレンチ東半部は最下層まで道路建設時の攪乱を受けていたため、遺構は確認されなかった。

SD 1 トレンチ西半にあり、砂礫層を切って南北方向に流れていた。溝の底部は激しい湧水のある砂層まで掘られていた。西肩は検出されなかったが、東肩はもろい黒色砂礫層で深さは40～50cmである。溝の中からは、30トレンチと同様の土師器や須恵器・瓦片・6世紀初頭の円筒埴輪片や須恵器の甍片が出土した。断面観察の結果、一度埋没した後、西側に小規模な形で掘り返された事が確認された。遺物から12世紀後半～13世紀初頭の溝と思われる。この事から30トレンチSD 2と同一遺構と思われる。ただし30トレンチの溝は東肩・西肩・底部が堅い砂礫層・砂泥層で比較的浅い溝であったが、31トレンチでは地山まで深く掘り込まれていた点と、東西幅も広がっている点、肩がもろい砂礫層である点などが異なっていた。

石敷き面 約5～10cmの黒色の砂礫層が広がっているが、明確な石敷きの遺構は確認されなかった。一方、トレンチ北壁断面を調査の結果、攪乱土壌の直下で約10～20cm大の丸石とした石込め地業の一部と思われる遺構面が確認された。遺物が出土しない事から詳細な時期は不明である。ただし30トレンチの石敷き地業の延長線上にある事から、地業の続きと思わ

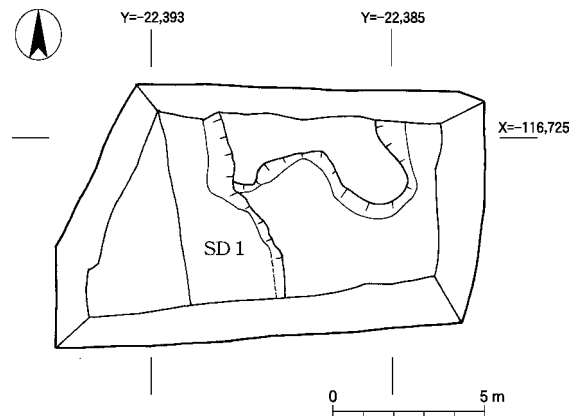


図16 31トレンチ平面図 (1 : 250)

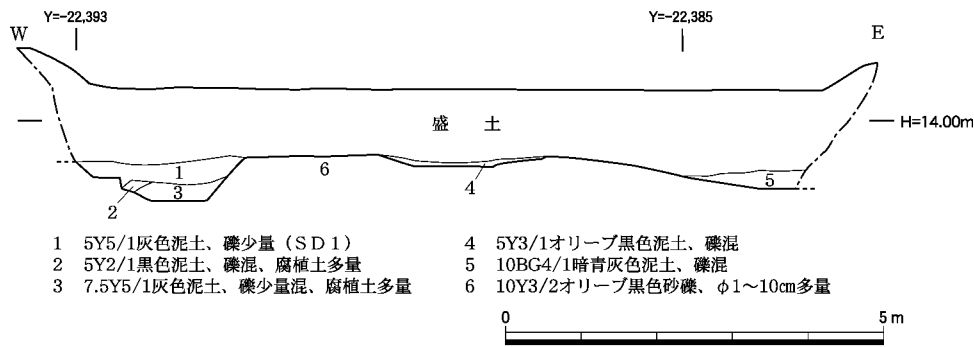


図17 31トレンチ北壁断面図 (1:100)

れる。

なお、この遺構面はSD1から溢れ出たと思われる遺物が中心であった事から、12世紀後半～13世紀初頭にかけての遺構面と思われる。

(3) 32トレンチ

現地地表下150cmで近世の水田土と床土が確認された。この下から白色砂層が確認され、その面を第1面とした。

第1面

トレンチ東北端で約10cm程度の玉石が密集した地業面が確認された。この石敷き面からは近世末期の遺物が検出された事から、水田形成時の整地と思われる。

SG2 トレンチ南東半全域に池跡が確認された。

池の北岸と西岸にあたる部分で2段の段差を持つ石敷きを確認された。砂層上面から30cm程度下がった所に石敷き面があり、さらに20cm下、微砂と粘土混じりの柔らかい土層の平坦面が続き、激しい湧水のあるこの面を池の底部とした。洲浜と思われる石敷き面では約5～10cmの自然石と瓦片がやや密集し、木片がまばらに散乱する状態であった。遺物から13世紀中頃が最終面であり、鎌倉時代中頃には池としての機能は廃絶したものである。

池の西肩に平行する形で砂層に2条の杭列が確認された。この面を掘削してみたところ、土留めと思われる杭片や流木・鬼瓦片が検出された事から溝状遺構と思われる。ただし堅い砂泥層が続く事から、路面の可能性を否定する事もできない。この下層から13世紀初頭の溝が検出された。その遺物は平安時代後期のものであるが、中世の流れ込みによる遺構と思われる。

SG2の遺物から12世紀後半～13世紀初頭にかけての遺構面である。ただし、この遺構面の砂礫層には中世の流れ込みがある事から、ほぼ中世全域を通すものである。

第2面

第1面の10cm下からこの面が確認された。

SG2 第1面同様2段の洲浜構造であった。この面では平坦面に石や瓦は少なく、斜面の部分に約5～10cm程度の石と瓦が密集していた。この面からは馬の骨(顎・骨・大腿骨)や木片・杭が大量に検出された。また洲浜の中に杭が打ち込まれ、護岸が行われていた。

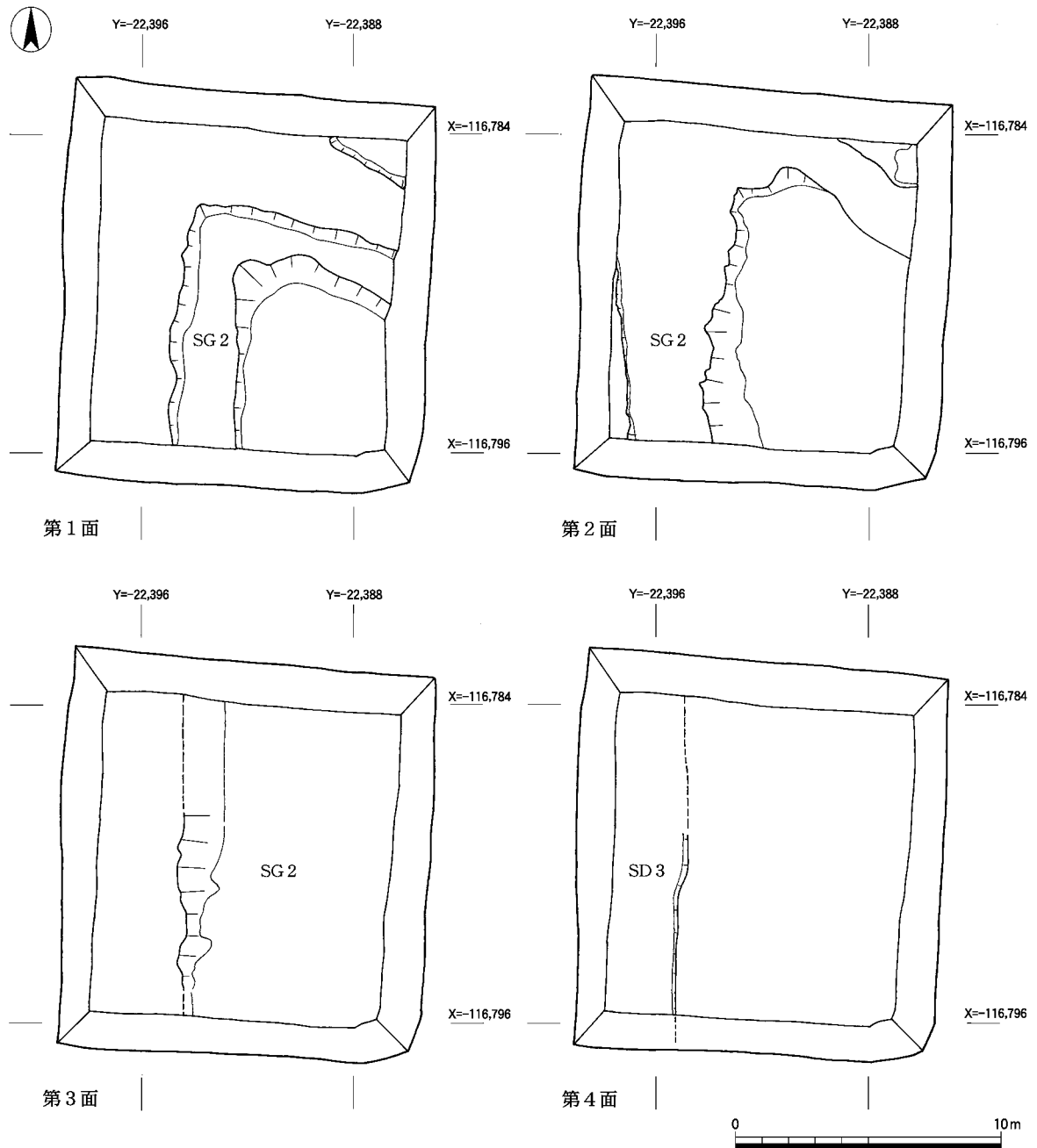


図18 32トレンチ平面図(1:250)

第3面

第2面の10cm下からこの面が確認された。

SG 2 第1・2面でみられた様な段階的な築造ではなく、石敷き面は洲浜下層の一部に集中して検出された。一方、洲浜上層部では瓦・馬の骨が密集するものの礫は少ない。最下層は沼地か湿地状の地であった事から、一旦堅い砂泥層まで掘り下げた後、瓦や砂礫によって池の肩部を築造するとともに周辺地域の盛土や地固めを行ったものと思われる。

なお、池の底部は砂泥層と激しい湧水が続き、明確な底部を確認する事はできなかった。

遺物が少ない事から第2・3面の明確な時期を確定する事はできなかった。

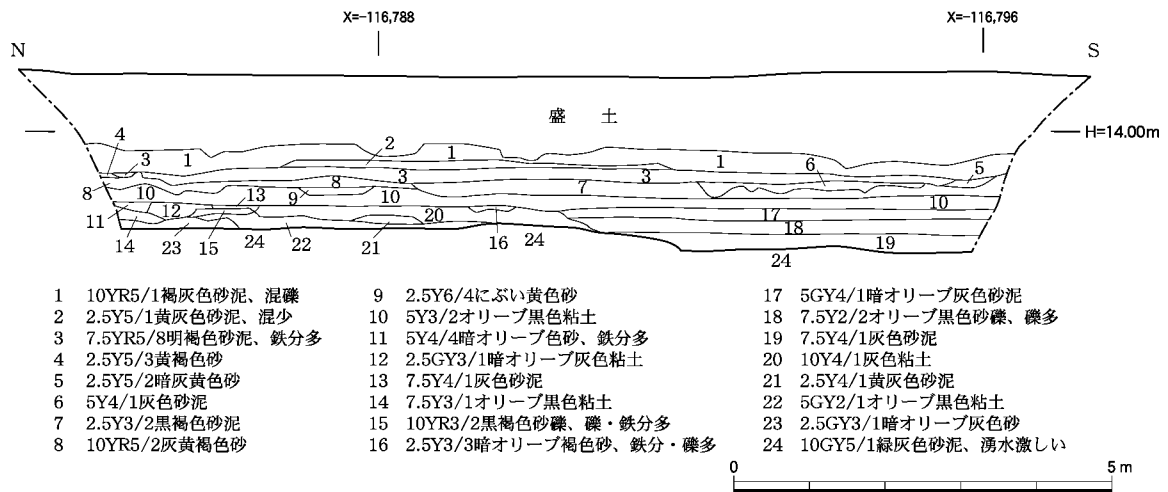


図19 32トレンチ東壁断面図 (1 : 100)

第4面

SD 3・SD 3 B 第3面のSG 2の西肩に添って、ほぼ南北に流れる溝が確認された。溝は灰色の砂層が中心で、瓦片や馬の骨・松の珠果によって埋まっていた。西壁は確認されなかったが、東壁は堅く締まった砂礫層であり、底部は礫のない砂層である。また壁断面によれば1度埋没した後、東半のみを掘り返された事が確認された。遺物から12世紀後半～13世紀初頭頃の溝である。この溝の下層からSD 3 Bが確認された。同方向の溝であり幅3m以上あると思われる。この溝は30・31トレンチで確認された溝の続きと思われる。

SG 2の西岸部分を下層まで掘削すると、約30cm大の馬の顎や大腿骨・瓦片・木片が大量に出た。また、この面からは古墳時代から平安時代にかけての遺物が検出された事から、旧鴨川・旧桂川の氾濫原のような状況であったと思われる。

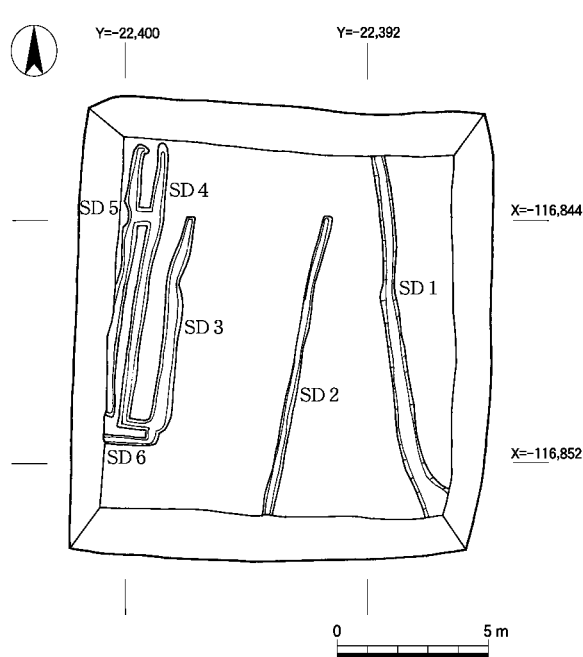


図20 33トレンチ平面図 (1 : 250)

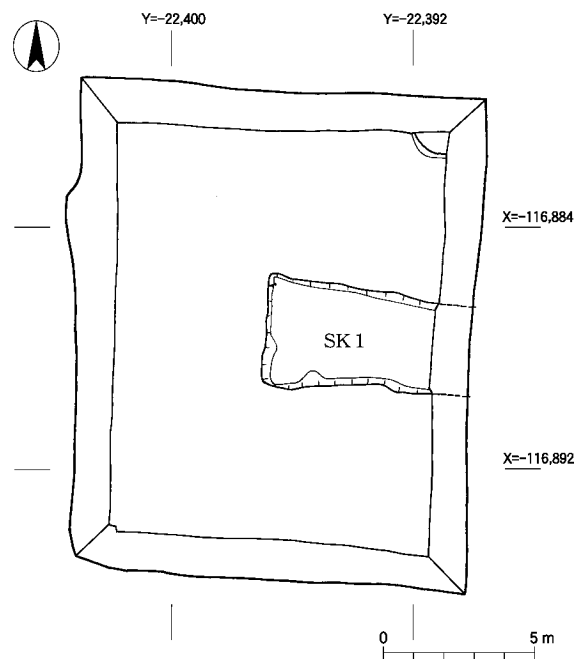


図21 34トレンチ平面図 (1 : 250)

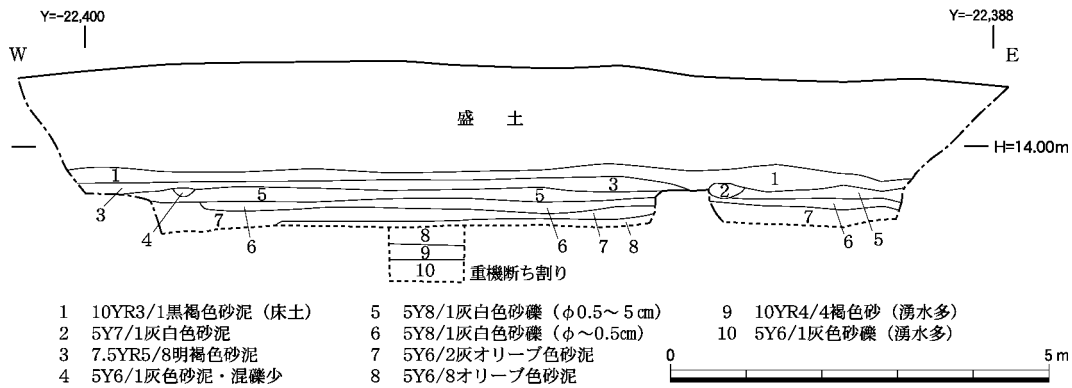


図22 33トレンチ北壁断面図 (1 : 100)

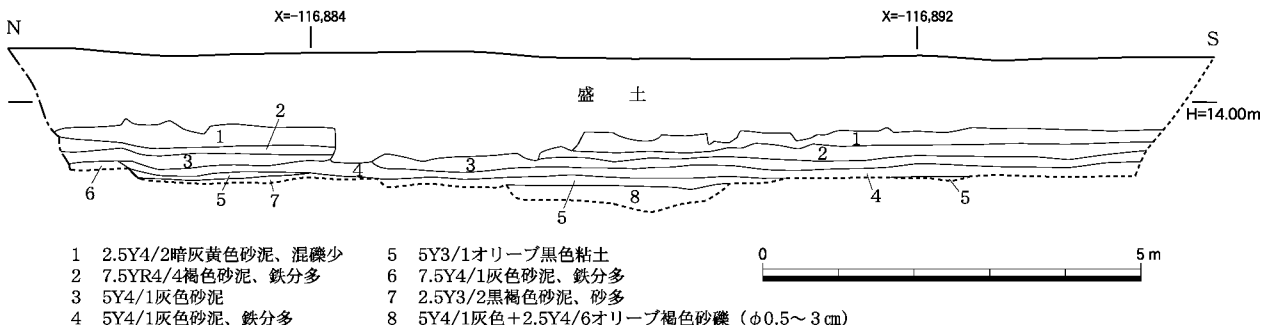


図23 34トレンチ東壁断面図 (1 : 100)

(4) 33トレンチ

現地地表下180cmで、水田土と床土が確認された。その下層はトレンチ全面が白色砂層になっており、旧鴨川の河床跡に入るものと思われる。

SD 1 ~ 6 最下層から水田造成の際に形成された小溝群が確認された。溝の出土遺物は少ないものの近世以降が主体である。この事から近世に水田化された事が確認された。

地表下300cmまで掘削したところ、激しい湧水のある砂礫層・砂層が続き、遺物・遺構を有する面は全く確認されなかった。

(5) 34トレンチ

現地地表下220cmで、3層の水田土と床土が確認された。床土の下は柔らかい灰色砂泥層になる。この部分を直接掘り込んだ土取り土壌SK 1が検出された。遺物から、この土壌は近世後期のものである。この層を掘り下げたところ、激しい湧水が確認された。この事から旧鴨川の河床跡であり、中世以降に水田化されたものと思われる。

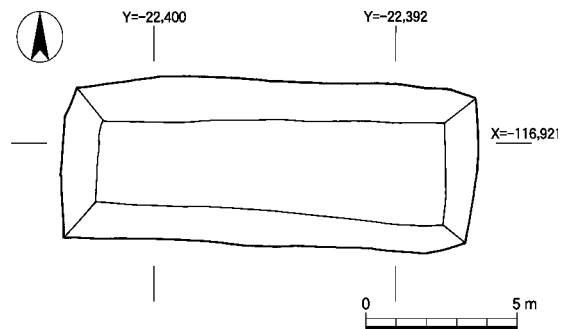


図24 35トレンチ平面図 (1 : 250)

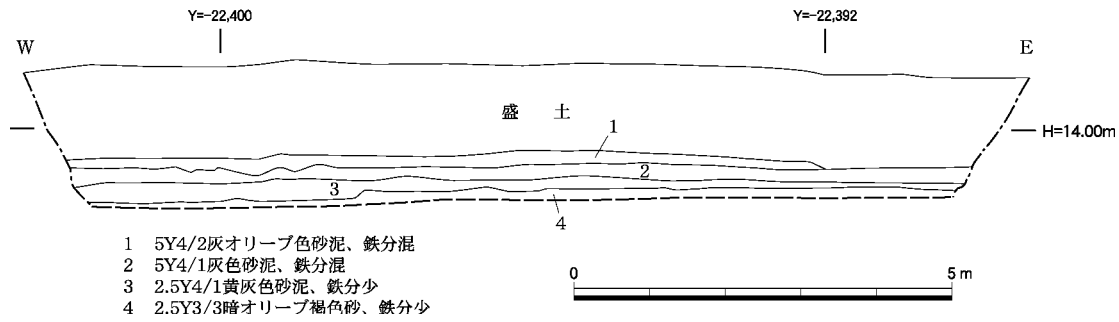


図25 35トレンチ北壁断面図(1:100)

表3 第4工区遺構概要表

時代	遺構					
	No.30トレンチ	No.31トレンチ	No.32トレンチ	No.33トレンチ	No.34トレンチ	No.35トレンチ
平安時代後期	SX 1		SG 2、 SD 3 B			
鎌倉時代	SD 2、SK 3	SD 1	SD 3			
江戸時代				SD 1～6	SK 1	流れ堆積

(6) 35トレンチ

現地地表下180～190cmで、3層の水田土・床土が確認された。床土の下は暗オリーブ褐色の礫のない微砂層で、旧鴨川の河床跡と思われる。この他にも遺構を有する面は確認されなかった。遺物は少ないものの、33・34トレンチの調査結果から水田化されたのは中世以降と思われる。

3 遺物

今回の発掘調査によって出土した遺物は、瓦や土師器を中心とし、木製品・銭貨・馬の骨などが主体である。30～32トレンチからは遺構に伴う出土が多いものの、33～35トレンチからは旧鴨川の河床であったためか、わずかな出土にとどまった。

(1) 30トレンチ

SX 1・SD 2 地業状遺構の西側は広い範囲にわたり土師器片・瓦器片・須恵器片があり、かなりの量が出土した。これを取り除くと下層にSD 2が現れたので九体阿弥陀堂廃絶かとも思える内容で最も新しい遺物は13世紀のものであった(図26-1・3～14)。平安時代以前の遺物は7世紀代や8世紀の須恵器があって古墳時代以降の集落に関連する遺物と理解する。SD 2は12世紀後半～13世紀初頭の溝で、土師皿片を主体に瓦器椀・馬骨・松の珠果がかなりの量見られた。また地業の中に含まれていたものは6で、最下層中には瓦器椀7があった。

SK 3 遺物には土師器皿(図26-2)、軒丸瓦(図27-26～33)、軒平瓦(図28-35～39)が

見られ、13世紀になって瓦を中心として整理されたものであろう。瓦類の内、26は完形に近い陶質の東海産瓦で釉と灰カブリが見られた。27~29の右巻三巴文は一ヶ所範傷が位置を変化させながら有り、すべて瓦質でイブシが掛かる。30は珠文を持たない三巴文で、京都産と思われる。31は陶質の右巻三巴文である。32は複弁蓮花文である。軒平瓦は、35~37が陶質の一群で東海産である。38は右巻三巴文を2+3+2に配し、瓦当上半の珠文は大珠で瓦当下半は小さい。また、顎部に「/」の記号が付いている。側面の両端が深く切り揃えられているのが特徴である。39は38と同文であるが、製作上で異なっている。先ず折り曲げ率が60度のものと90度のものの二種が存在する。顎部に「//」の記号があり、板叩きが荒く、布目に荒れが見られる。この種の紋様は勸業館で出土した例に近いが、鳥羽離宮跡では初出であり、同文も20点近く出土した。

特殊平瓦 凸面に段を有する平瓦(図29-51・52)が完形状態で出土した。51はSK3から出土し、52は地業断ち割りの最下層から出土した。51は凹型台で作られ、52は凸型台で作られている。51には凹面に叩きは認められず、52は凸面に縄目叩きがあり、上面に竹管の記号が付くのが

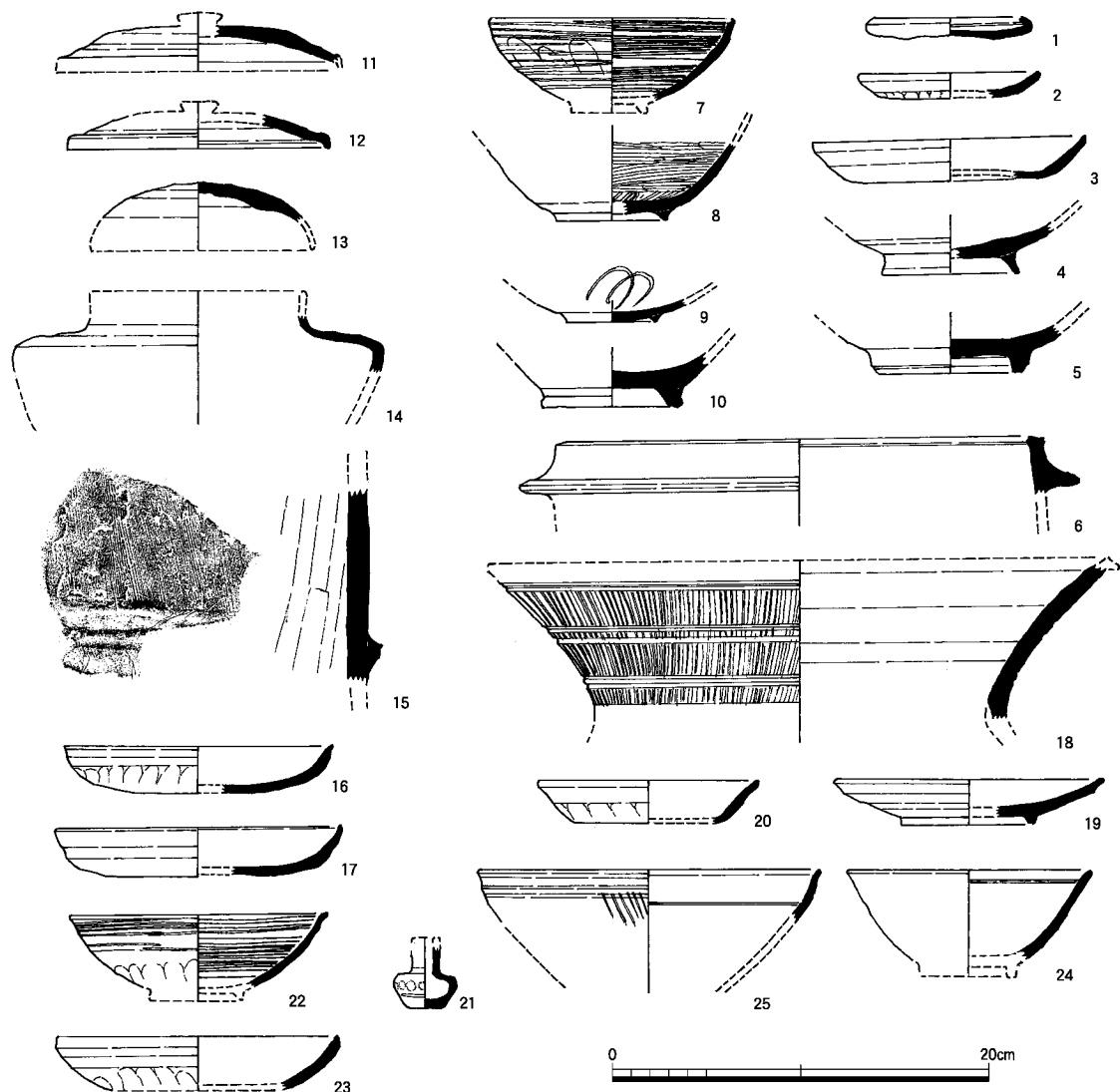
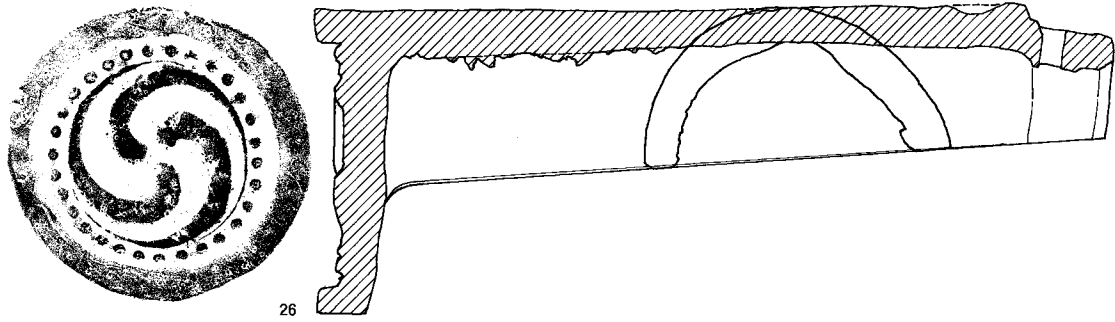


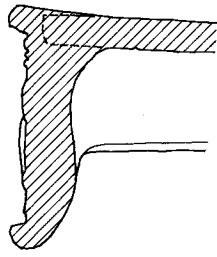
図26 第4工区出土遺物実測図(1:4)
30トレンチ: 1~14、31トレンチ: 15~17、32トレンチ: 18~25



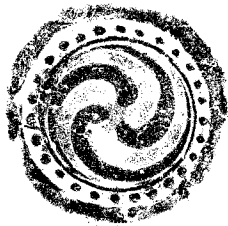
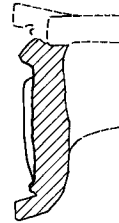
26



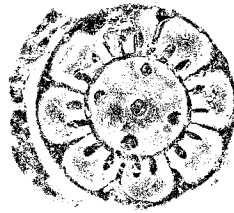
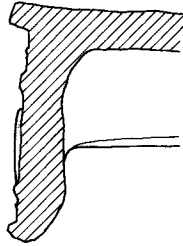
27



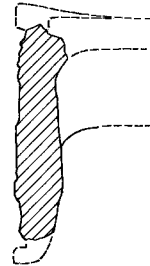
31



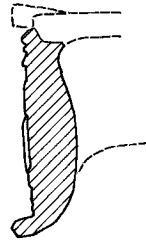
28



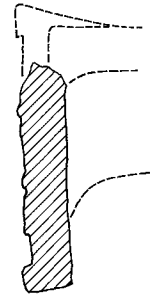
32



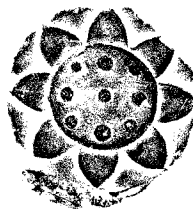
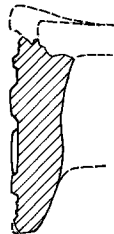
29



34



30



33

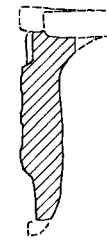


図27 第4工区出土軒丸瓦拓影・実測図(1:4) 30トレンチ:26~33、No32トレンチ:34

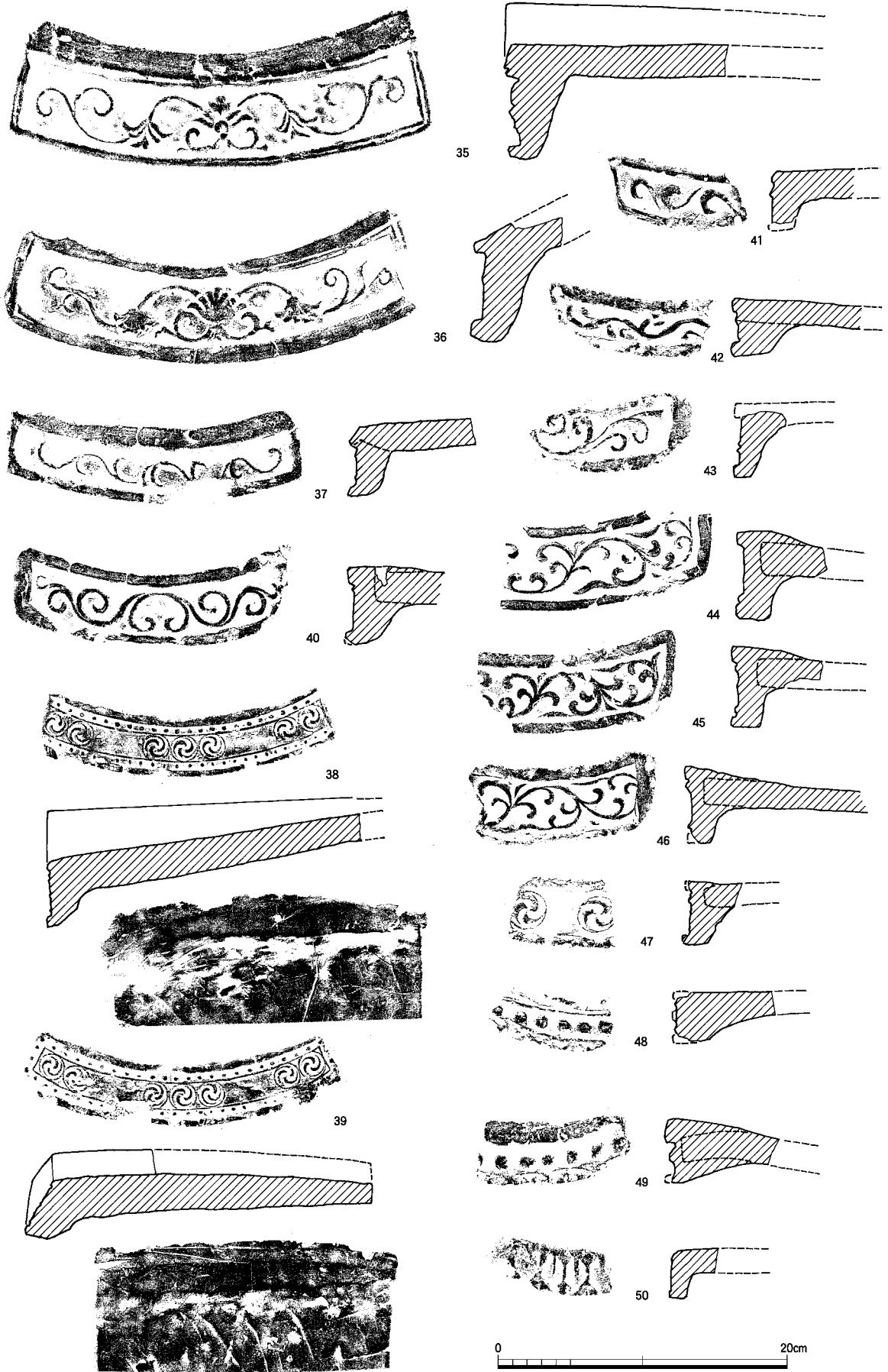


图28 第4工区出土軒平瓦拓影・実測図(1:4) 30トレンチ:35~39、32トレンチ:40~50

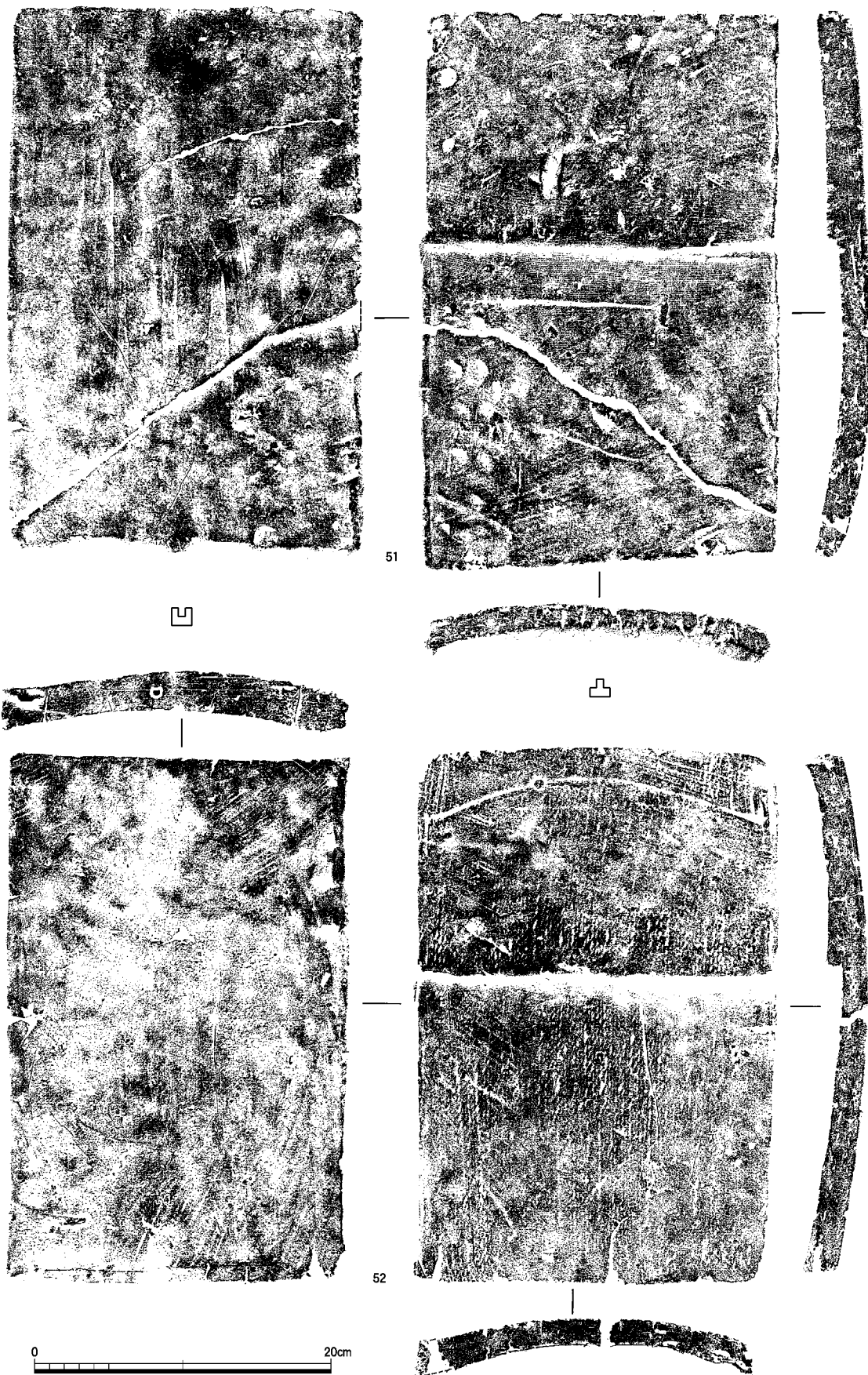


図29 30トレンチ出土特殊平瓦拓影（1：4）

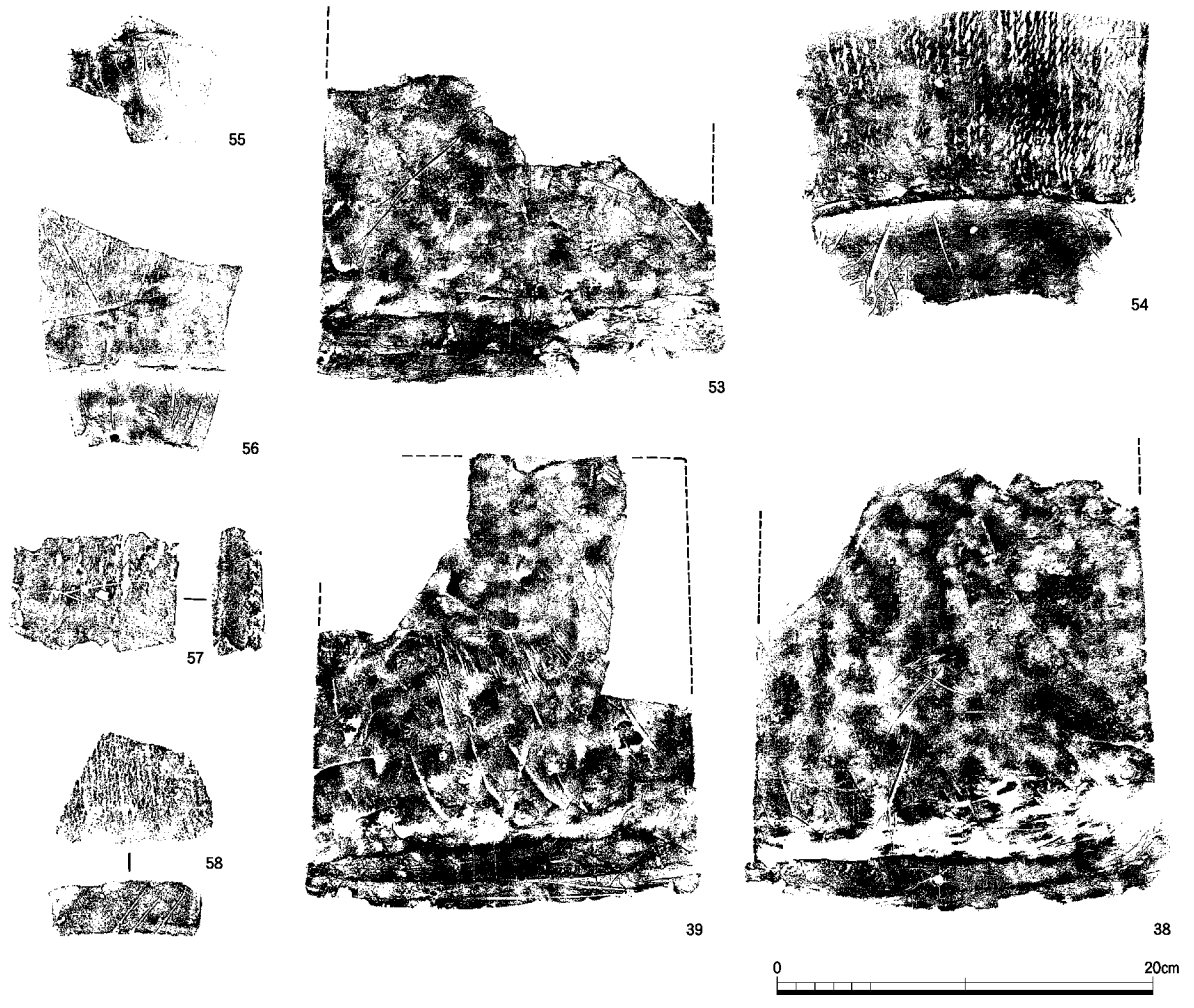


図30 30トレンチ出土記号瓦拓影（1：4）

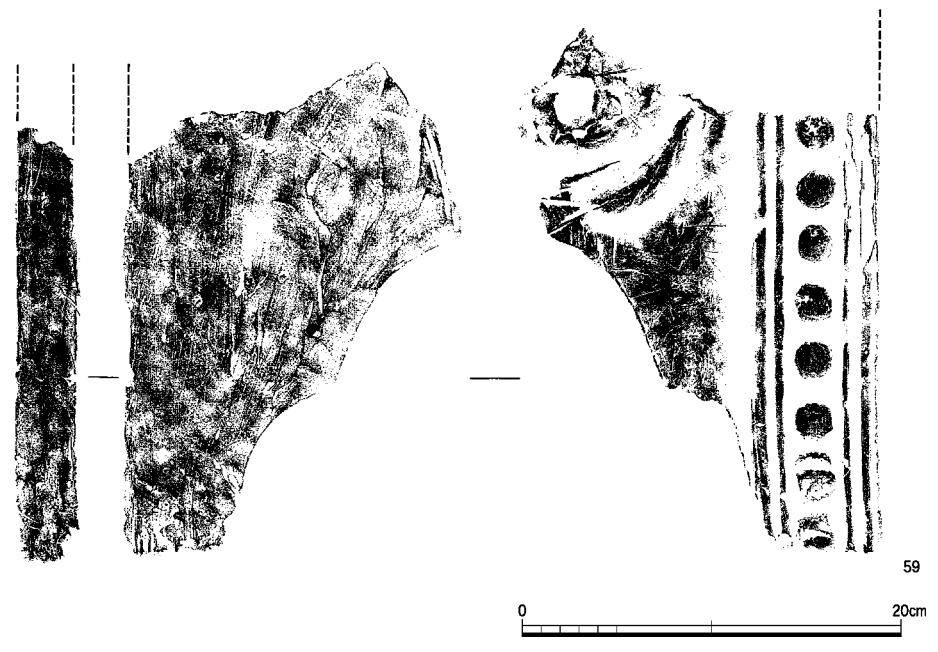


図31 32トレンチ出土鬼瓦拓影（1：4）

新発見である。この瓦は段付きの丸瓦とも対応する極めて特異な瓦で、特別な建物であった成菩提院で使用されたと思われる。

記号瓦 軒平瓦（図30 - 38・39・53）丸瓦（54～56）平瓦（58）熨斗瓦（57）がある。54は玉縁上面に「 / 」、55は玉縁上面に「 // 」、56は「 /// 」のヘラ描きが付く。58にも側面に「 /// 」が付く。38は「 / 」、39・53は「 // 」、57は「 < 」が付く。

（ 2 ） 31トレンチ

遺物は第1面の砂礫層とSD1からの出土が中心である。ただし激しい湧水の結果、トレンチ全域の発掘調査ができなかった事から遺物量は少なかった。

SD1 30トレンチSD2と同様に12世紀後半～13世紀初頭の瓦や土師器皿片（図26 - 16・17）を中心に、瓦器椀・馬の骨・松の珠果が主体である。ただし、6世紀代の円筒埴輪片（15）や須恵器の甕片・短頸壺片がややまとまって出土した。

一方、砂礫層直上からは、SD1とほぼ同時期の土師器片のほか、6世紀代の土器片や9世紀代の須恵器小片、さらに松の珠果・馬の骨がわずかに出土したのみである。

（ 3 ） 32トレンチ

SG2 池内より土師器皿（図26 - 20・23）瓦器椀（22）が出土した。この池が最終的に埋まった時期に入った土師器皿と瓦器から13世紀代と考えた。

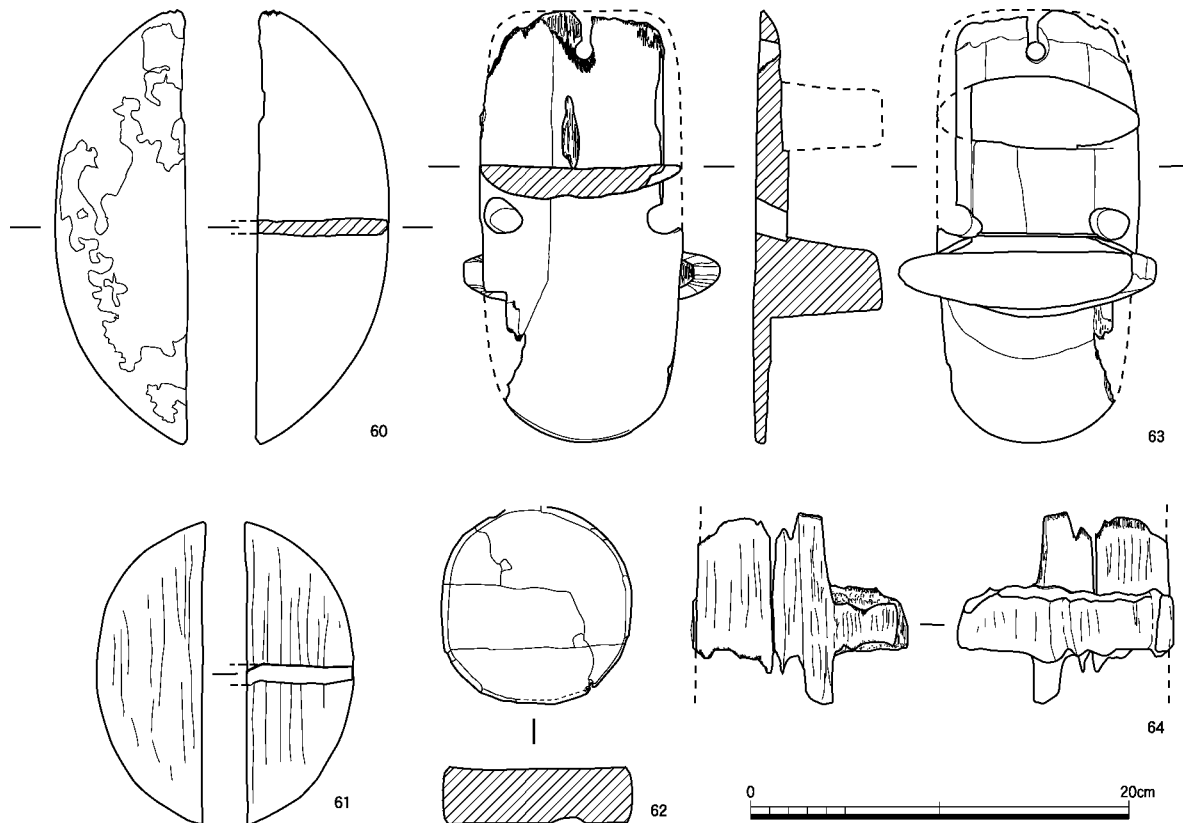


図32 32トレンチ出土木製品実測図（1：4）

礫敷の岸辺の西岸・北岸に多量の馬の骨に混じって須恵器甕（図26 - 18）、土師器壺（21）、軒丸瓦（図27 - 34）、軒平瓦（図28 - 40～50）など、瓦や土器が層をなして出土したものである。瓦類の特徴は播磨産、京都産、南都産で構成され、30トレンチSK3とはかなり違うものである。その他、銭貨「景德元寶」「元豊通寶」「熙寧元寶」などが出土している。

SD3 灰釉陶器皿（図26 - 19）が出土した。

鬼瓦 第2面トレンチ北西端で鬼瓦（図31 - 59）出土した。播磨産であると思われる。

木製品（図32 - 60・61）はSG2の池水線近くから出土した曲物の底板である。60には黒漆が残存していた。61は小型の底板である。（63・64）は下駄で恐らく12世紀の遺物である。高下駄に属し羽部が扇状に広がり厚い。（62）は近世の円板状木製品で類例を知らない。

（4） 33トレンチ

遺物はトレンチ最下層の小溝群と、最下層から少数出土したのみである。溝からの出土遺物は小片のみで、12世紀後半～17世紀代の土師器皿が主体である。また溝以外の最下層は旧鴨川の河床部と推測されるが、9世紀代の須恵器小片がややまとまって出土したものの、6世紀代～17世紀代までの土師器片や瓦器片がわずかに出土したに過ぎない。

その他、青磁椀（図26 - 24・25）、銭貨「元祐通寶」が出土している。

表4 第4工区遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
古墳時代	円筒埴輪、須恵器	12箱	円筒埴輪1点、須恵器1点	1箱	10箱
奈良時代	須恵器		須恵器4点		
平安時代前期	須恵器、灰釉陶器		灰釉陶器1点		
平安時代後期	土師器、瓦器、灰釉陶器、輸入陶磁器、銭貨		土師器7点、瓦器4点、灰釉陶器2点		
鎌倉時代	土師器、瓦器、輸入陶磁器、山茶椀		青磁2点、瓦器1点、山茶椀1点		
近世	土師器	土師器1点			
平安時代後期	軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、鬼瓦、特殊瓦	64箱	軒丸瓦9点、軒平瓦16点、特殊平瓦2点、記号瓦6点、鬼瓦1点	7箱	50箱
	木製品（下駄、曲物、漆器、円板状製品）	7箱	下駄2点、曲物底板2点、円板状木製品1点	0箱	6箱
	馬の骨	11箱		0箱	11箱
計		94箱	64点（9箱）	8箱	77箱

(5) 34トレンチ

遺物はトレンチ最下層と土取土壌から少数出土したのみである。最下層は旧鴨川の河床部と推測されるが、13世紀代の瓦器椀、15世紀代の土師器・羽釜がわずかに出土したのみである。壁面整形中に12世紀代の輸入品と思われる施釉陶器の甕片が出土したものの、33トレンチのように古墳時代や平安時代の遺物を確認する事はできなかった。また土取土壌からは近世以降の比較的新しい焼締陶器の甕片が出土したのみであった。

(6) 35トレンチ

遺構面は全く確認されず、旧鴨川の河床部と推測される微砂層からも6世紀代の土師器の甕と、9世紀代の須恵器小片が出土したのみである。

4 ま と め

今回の調査の結果、鳥羽離宮まで遡られる遺構が確認されたのは30～32トレンチのみであった。一方、33～35トレンチでは、旧鴨川の河床跡・流路跡であった。また鳥羽離宮成立以前、さらに鎌倉時代中頃以降は旧鴨川・旧桂川の氾濫原や沼地のような状態であり、ほとんど利用されなかった事が確認された。また、江戸時代後期に水田化されるまで、暫く積極的な土地利用が行われなかった事も確認された。

(1) 30トレンチ

鳥羽離宮の堂塔の基礎と思われる石敷き地業・粘土ブロックの地業が検出された。また、ほぼ同時期に築造された溝、瓦などを一括廃棄した土壌（溝状遺構）が確認された。

石敷き地業面は3面に分けて築造されていた。2・3面の築造は、遺物が少ない事から正確な築造年代は不明である。一方、1面は13世紀初頭以降である。

溝は1・2面の地業を切って北から南にかけて流れている。この溝は遺物から12世紀後半～13世紀初頭にかけてのものである。また、この溝上面には、ほぼ同時期の土師器片を含む包含層が確認された。遺物が一致する事から、この溝から流失したものと推測される。

土壌は包含層の下から検出された事から、13世紀初頭以前の土壌である。

こうした結果から当トレンチでは11世紀後半、鳥羽離宮の建設とともに湿地状の地に石敷きの地業を施し堂塔が建立されたものの、12世紀後半代、一旦この堂塔は廃絶した。その際に南北の溝と瓦を廃棄するための土壌が作られた。13世紀初頭、再び石敷きの地業を持つ堂塔が再建されたものの、13世紀中には廃絶したものと推測される。また13世紀中期以降、このトレンチは旧鴨川・旧桂川の氾濫原や湿地状の様な土地になっていたと思われる。

(2) 31トレンチ

鳥羽離宮に関連する堂塔の基礎と思われる石敷きの地業面は、トレンチ北壁断面図でほぼ同時期の溝で確認されただけであった。

石敷き地業と思われる遺構面は、北壁断面で確認されたに過ぎない。本来、石敷き面がある地点は荒い砂礫層が広がっていた。この面は12世紀後半～13世紀初頭の遺構面と思われる。

溝は砂礫層を切る形で激しい湧水のある地山の砂層まで掘り切られていた。この溝は遺物の時期が一致する事から 30トレンチSD1と同一遺構である事が確認された。

こうした結果から 30トレンチで確認された石敷き地業を持つ堂塔が当トレンチまで続く事が確認された。ただし、13世紀初頭の溝から溢れ出たと思われる遺物が広がっていた事から、31トレンチの建物は溝形成以前のもので、13世紀初頭にはこの地区は放棄されたものと推測される。中世、この地区は旧鴨川・旧桂川の氾濫原や湿地状の様な土地になっていたと思われる。

(3) 32トレンチ

鳥羽離宮に関連する池と、ほぼ同時期の溝が確認された。

池はトレンチ南東全域で3面にかけて築造された事が確認された。最下層は湧水のある砂泥層で馬の骨や木片・礫が出土したものの、遺構を有する面は確認されず流路が湿地状の土地であった事が確認された。洲浜の時代を特定する遺物の検出が少なかった事から、正確な時期を特定する事ができなかった。ただし3面の洲浜から13世紀代の遺物が出土した事で、池は13世紀初頭が最終面である。また1・2面の洲浜上は流れ込みと思われる木片・骨が大量に検出された。この事から1・2面の池は旧鴨川と旧桂川の洪水によって埋没したため改修されたものの、13世紀代には池としての機能は完全に失われ放棄されたものと推定できる。

溝は池の西に隣接する形で南北方向に深く地山付近まで掘り込まれていた。遺物や掘り返しがあつた事などから、30・31トレンチの溝と同一遺構である事が確認された。この溝は32・33トレンチの間で旧鴨川に流れ込むものと思われる。この溝の上層は堅く締まった白色砂層で、南北方向に杭が打ち込まれていた。そのため道路状の遺構と思われたが、掘削してみたところ、中世の流れ込みと思われる流木・鬼瓦片・銭貨などが出土した。こうした結果から当トレンチでは

30・31トレンチの建物の石敷き地業面は検出されず、建物は現在の城南宮道付近が南端であつたものと思われる。一方、池は30トレンチの建物と同様に11世紀後半、鳥羽離宮造営とともに湿地状の地に瓦・砂礫による地固めにより高台と園池が建設された。この池は度々の洪水により3度改修されたものの、13世紀初頭には廃絶したものと推測される。13世紀以降では旧鴨川・旧桂川の氾濫原や両河川からの流れ込みにより、湿地状の地になっていたものと思われる。

(4) 33～35トレンチ

近世、鴨川が現在地に付け替えられるまで旧鴨川の河床部にあたる事が確認された。また河川

付け替え後も積極的な土地利用が行われておらず、江戸時代後期になってようやく水田化されたものと思われる。

今回の発掘調査の結果、鳥羽離宮にあった堂塔は 30トレンチで西限、31トレンチで石込め地業の一部が検出され、32トレンチでは付属する池跡が確認された。この事から堂塔は現在の新油小路通のほぼ中央が堂塔の西端であり、城南宮道付近が南端として推定する事ができる。現在の城南宮道は、条里制によれば桜井里と木里の境界線に当たる事から、今回で確認された堂塔や池はその影響を受けていたとも考えられる。また、池周辺から多量の松の珠果が出土した事から、松林が広がっていたものと思われる。

それでは今回の調査で確認された堂塔は何であろうか。白河法皇の崩御により鳥羽法皇は天承元年（1131）故院の御所であった三条烏丸御所の西の対屋を鳥羽離宮内泉殿の跡に移築した事が知られている。この堂は7間4面孫庇付きの堂で、「九体阿弥陀堂」と称し、半丈六の阿弥陀像を安置したとする。この事からやや小規模な堂宇であったものと思われる。泉殿の跡地は30トレンチの北方、白河天皇陵と鳥羽天皇陵に挟まれた地点にあった事が想定されている。阿弥陀堂の位置は、やや南に下がる。また「安楽寿院阿弥陀堂供養願文」によれば久安3年（1147）8月に9間4面檜皮葺きの堂を1宇建立し、丈六の阿弥陀像9体を安置したとする。30・31トレンチで検出された大きな地業跡を考えると、西向きの南北方向の堂に最も相応しいのは、この堂と想定する事ができる。ただし檜皮葺きであるので30トレンチSK3の瓦は装飾的に使用されたものと思われる。そもそも旧巨椋池の平均水面は約12mラインである。その一方、32トレンチで確認された池の汀線は約13mであり、ほとんど落差がない事が確認された。鳥羽離宮が廃絶したのは後白河天皇が鳥羽離宮でなく「法住寺殿」を根拠地にした事などがあげられるが、大きな原因は旧鴨川・旧桂川の洪水が原因と考えられる。実際、長治2年（1105）には鴨川・桂川が氾濫し、鳥羽殿が浸水したとする記述もある。また発掘調査の結果、32トレンチの池や30～32トレンチの溝が13世紀初頭にほぼ同時に埋没していた事や、どの調査区からも約12～13m付近から激しい湧水があり、現在も水捌けの悪い土地である。この事から、鳥羽離宮が安定して継続するためには両河川から水の流入を防ぐ堰堤と、土地を乾燥させるための水抜きのための池と溝、また湧水を伴う園池の水位を調節する必要がある。これが機能されていればこそ洪水や湧水から離宮の殿舎が守られたのであり、津としての機能も維持されたと考えられる。いずれにしても、鳥羽殿の建物が存在するには満水時の水位より高い位置まで地固めする必要があり、排水面を考察すると庭園内の園池は調整機能の側面もあったと考えるべきであろう。

参考文献

小牧実繁編『城南 - 鳥羽離宮址を中心とする - 』城南宮 1967年

下鳥羽遺跡（第5工区）

1. 調査経過

調査地は、京都市伏見区竹田松林町から下鳥羽東芹川町に渡っている（第5工区）。当地域は北を府道伏見向日線（津知橋通）、西に国道1号（京阪国道）、南を丹波橋通などの幹線道路が走り、東を東高瀬川が流れる。現在の景観は、水田や畑作などの耕作地が展開する一方で、運輸・自動車・工務・電気関係の中小企業の進出も著しい。

当調査地は、鴨川と桂川合流点の右岸に位置している下鳥羽遺跡にあたる。周辺の旧地形は鴨川・桂川による沖積低地が展開している。洪水等によって砂や礫が堆積した高まりである自然堤防状には竹田・下鳥羽などの古くからの集落が立地している。周囲の低平な氾濫平野は、ほとんどが水田として利用されてきた。

下鳥羽遺跡はこうした自然堤防上に立地した遺跡である。発掘調査はこれまでに昭和61年度と昭和62年度に実施され、弥生時代前期の土壌・溝、弥生時代中期の方形周溝墓状遺構・竪穴住居跡、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての竪穴住居跡、古墳時代後期の土壌墓・溝、平安時代前期に属する流路、中期の井戸、鎌倉・室町時代の耕作に伴う溝群などを検出している。本調査は

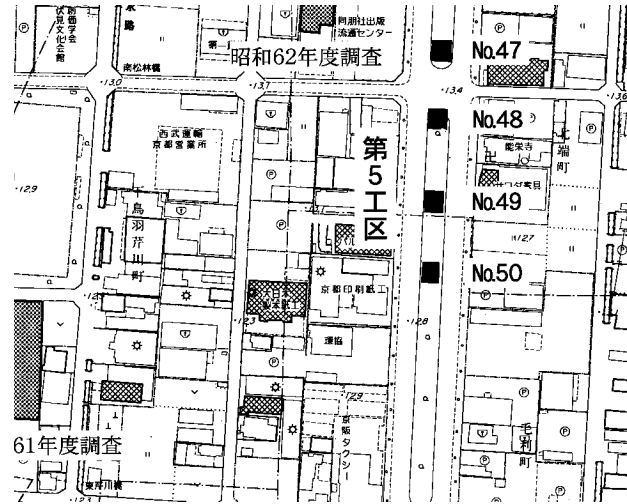


図33 第5工区調査位置図（1：5,000）



図34 第5工区調査前全景



図35 第5工区調査風景

弥生時代から古墳時代の遺構検出を主目的として臨んだ。

調査は遺跡範囲内を通る 46～50トレンチの5ヶ所で行った。49・50トレンチは中世遺構面まで、46～48トレンチは平安時代遺構面まで重機による掘削を行った。掘削終了後に遺構検出、遺構掘り下げを行い、全景撮影、図面作成などの記録作業を行った。調査の最終段階で断ち割りを実施し、下層遺構の確認、断面図作成などの作業を行い、調査を終了した。

2. 遺構・遺物

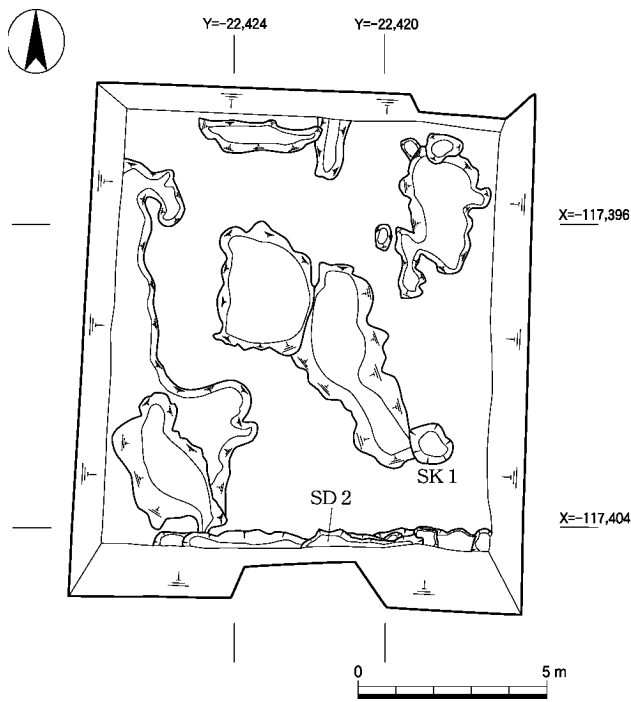


図36 46トレンチ平面図(1:200)

(1) 46トレンチ

基本層位は盛土、7.5Y3/2オリーブ黒色泥砂、2.5Y6/2灰黄色泥砂、2.5Y5/2暗灰黄色砂泥、5Y4/2灰オリーブ色砂泥、2.5Y4/1黄灰色砂泥、2.5Y4/2暗灰黄色砂、5GY4/1暗オリーブ灰色粘質砂泥、2.5Y4/1黄灰色砂礫である。暗灰黄色砂層から下層は流路状の堆積を示している。

主要な遺構は、SK 1とSD 2である。南壁際で検出したSD 2の西側は調査区内で完結しているが、南肩と東側は調査区外に展開している。この遺構からは菊花文の軒丸瓦(図46-1)が出土している。文様、接合部などの特徴から桃山時代以降に属する瓦と思われる。

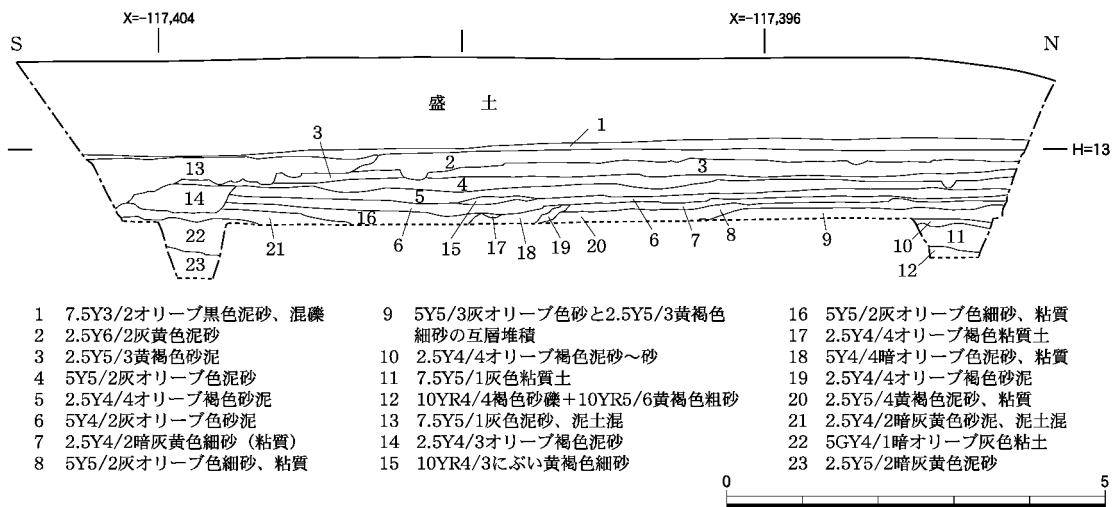


図37 46トレンチ西壁断面図(1:100)

(2) 47トレンチ

基本層序は盛土、10YR5/1褐灰色泥砂、2.5Y5/2~5/3黄褐色泥砂、5Y5/2~4/2灰オリーブ色砂泥、2.5Y5/2暗灰黄色砂泥、10YR4/2~5/2灰黄褐色泥砂、7.5YR4/1褐灰色砂泥、10Y4/1灰色粘土、10Y3/1オリーブ黒色泥砂、2.5GY4/1暗オリーブ灰色粗砂となっている。平安時代の遺構は灰黄褐色泥砂、褐灰色砂泥などで成立している。

主な遺構はSK 1、Pit 2、SD 3・4などを検出している。トレンチ中央部では、柱穴が東西方向に各々の間隔が1 m前後で配されていることから何らかの建物の存在を推測している。また、この柱列の南約60cmのところSD 4を検出しており、柱列に付随する遺構と考えている。

遺物は、SK 1から黒色土器椀(図46-2)、Pit 2から土師器皿(3・4)、黒色土器椀(5)が出土した。黒色土器椀はBタイプで9世紀中頃、土師器は10世紀前半に属すると考えている。

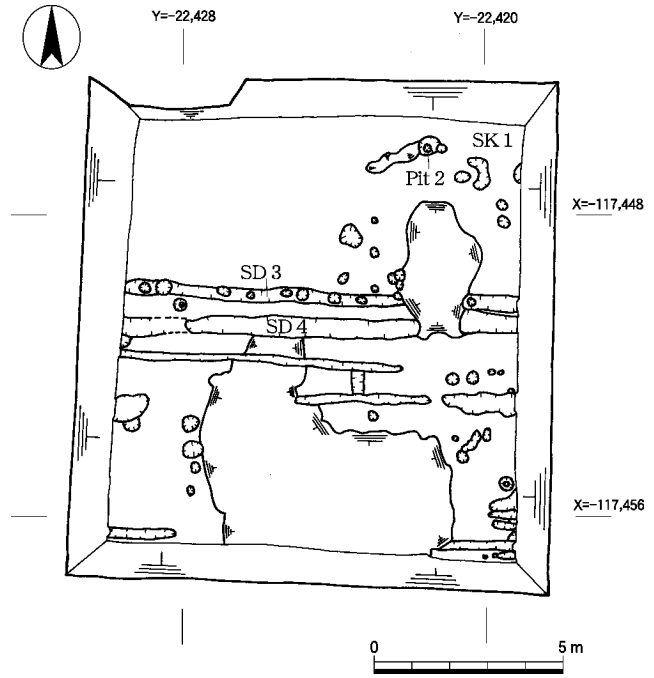


図38 47トレンチ平面図(1:200)

(3) 48トレンチ

基本層序は盛土、5Y5/1 4/1灰色泥砂、5Y4/1灰色砂泥 + 10YR4/3にぶい黄褐色泥砂、10Y5/1~4/1灰色泥砂 + 2.5Y4/3オリーブ褐色泥砂、10Y4/1灰色粘土、10Y4/1灰色泥砂 + 10YR4/2~

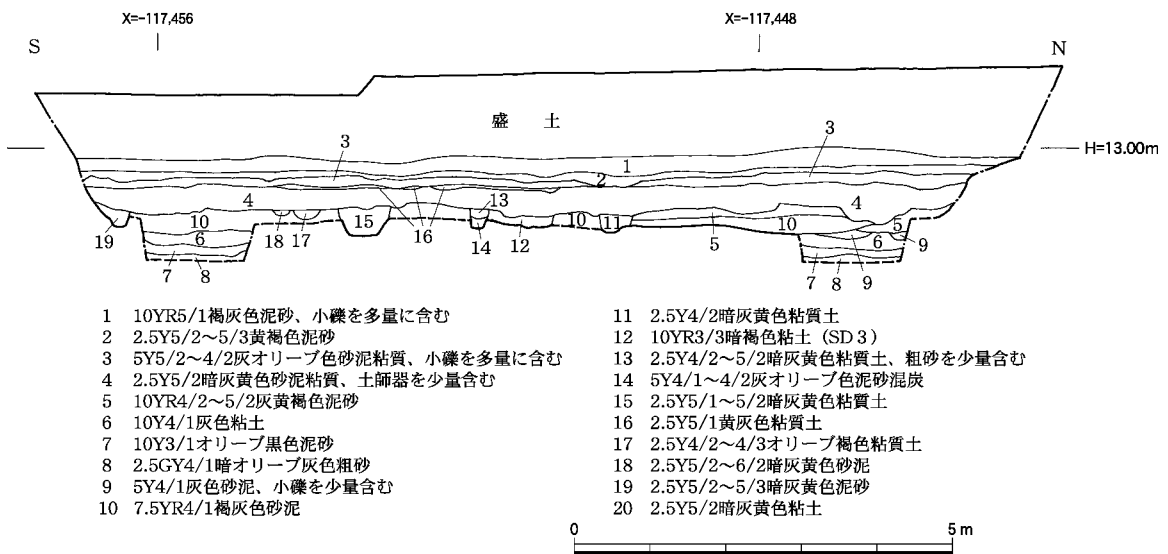


図39 47西壁トレンチ断面図(1:100)

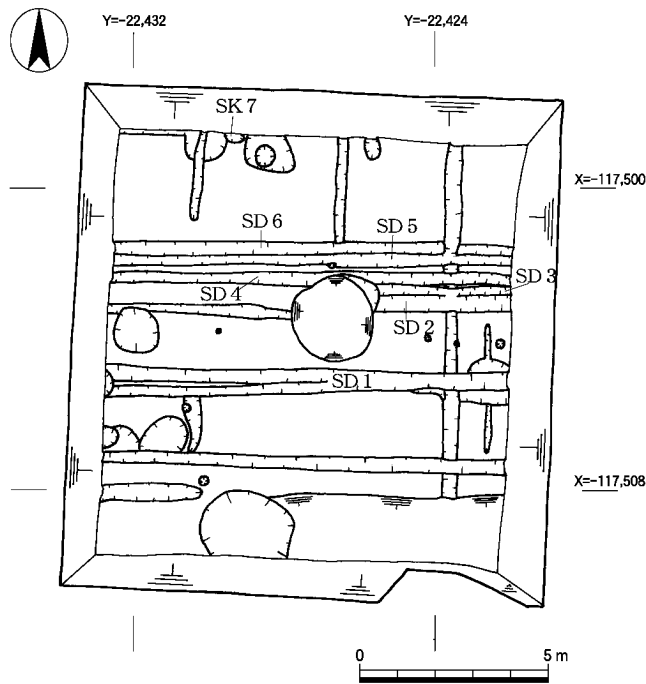


図40 48トレンチ平面図(1:200)

3/2黒褐色泥砂、2.5Y6/1黄灰色微砂、2.5Y5/1黄灰色微砂となっている。平安時代の遺構は灰色泥砂+黒褐色泥砂で成立している。

主な遺構はSD 1 ~ 6 など耕作に伴う小溝の他にSK 7を検出している。

SD 1からは瓦器椀(図46-6)が出土している。12世紀に属し、楠葉産と考えている。なお、この瓦器は小片から復元したため、体部はもう少し広がるとも考えられる。SK 7から出土した鍔付の甕(7)は8世紀代と考えられる。

(4) 49トレンチ

基本層序は盛土、2.5Y4/1黄灰色砂泥、5Y4/2灰オリーブ色泥砂、5Y4/1灰色砂礫~2.5Y5/1黄灰色粗砂である。中世の遺構は灰オリーブ色泥砂層(第1面)で成立している。平安時代の遺構はその直下で成立している(第2面)。

第1面では柱穴、溝状遺構、土壌などを検出した。これらの中でSD 9から北へ約1mのところにPit 1~8の柱穴列を検出しており、なんらかを区画する施設と推定している。

第2面で検出した遺構は、溝状遺構、土壌などである。SD 10~15などの耕作に伴う溝や柱穴などを検出している。SD 11・12を北壁際で検出しており、調査区を東西に貫いている。SD 11はSD 12を切っており、SD 12を掘り直したものであろう。

SD 10から出土した遺物は土師器鍋(図46-8)である。9世紀に属し、摂津産と考えている。SD 11からは土師器皿(9)が出土している。10世紀後半に属するものである。SD 15からは黒色土器椀(10)が出土している。Bタイプに属し、11世紀のものである。

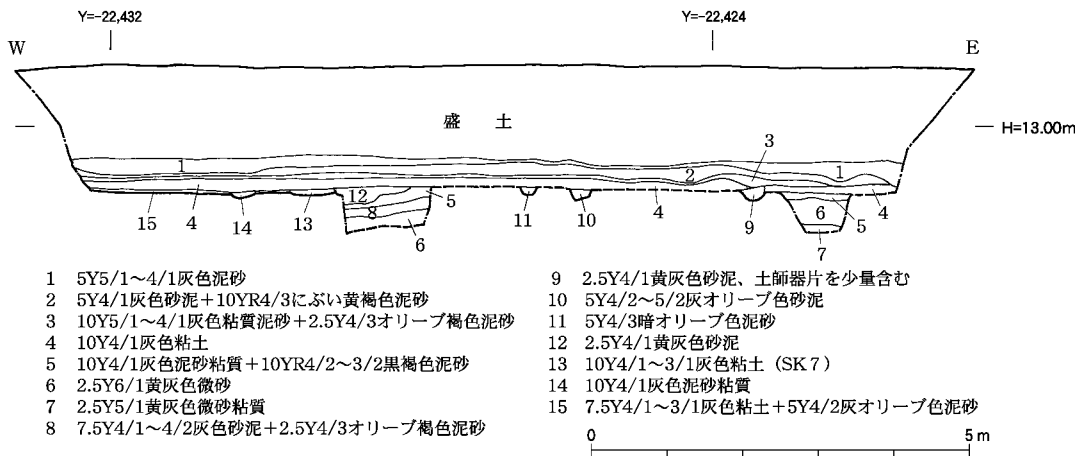


図41 48トレンチ北壁断面図(1:100)

- | | |
|------------------------------------|----------------------------------|
| 1 5Y5/1~4/1灰色泥砂 | 9 2.5Y4/1黄灰色砂泥、土師器片を少量含む |
| 2 5Y4/1灰色砂泥+10YR4/3にぶい黄褐色泥砂 | 10 5Y4/2~5/2灰オリーブ色砂泥 |
| 3 10Y5/1~4/1灰色粘質泥砂+2.5Y4/3オリーブ褐色泥砂 | 11 5Y4/3暗オリーブ色泥砂 |
| 4 10Y4/1灰色粘土 | 12 2.5Y4/1黄灰色砂泥 |
| 5 10Y4/1灰色泥砂粘質+10YR4/2~3/2黒褐色泥砂 | 13 10Y4/1~3/1灰色粘土(SK 7) |
| 6 2.5Y6/1黄灰色微砂 | 14 10Y4/1灰色泥砂粘質 |
| 7 2.5Y5/1黄灰色微砂粘質 | 15 7.5Y4/1~3/1灰色粘土+5Y4/2灰オリーブ色泥砂 |
| 8 7.5Y4/1~4/2灰色砂泥+2.5Y4/3オリーブ褐色泥砂 | |

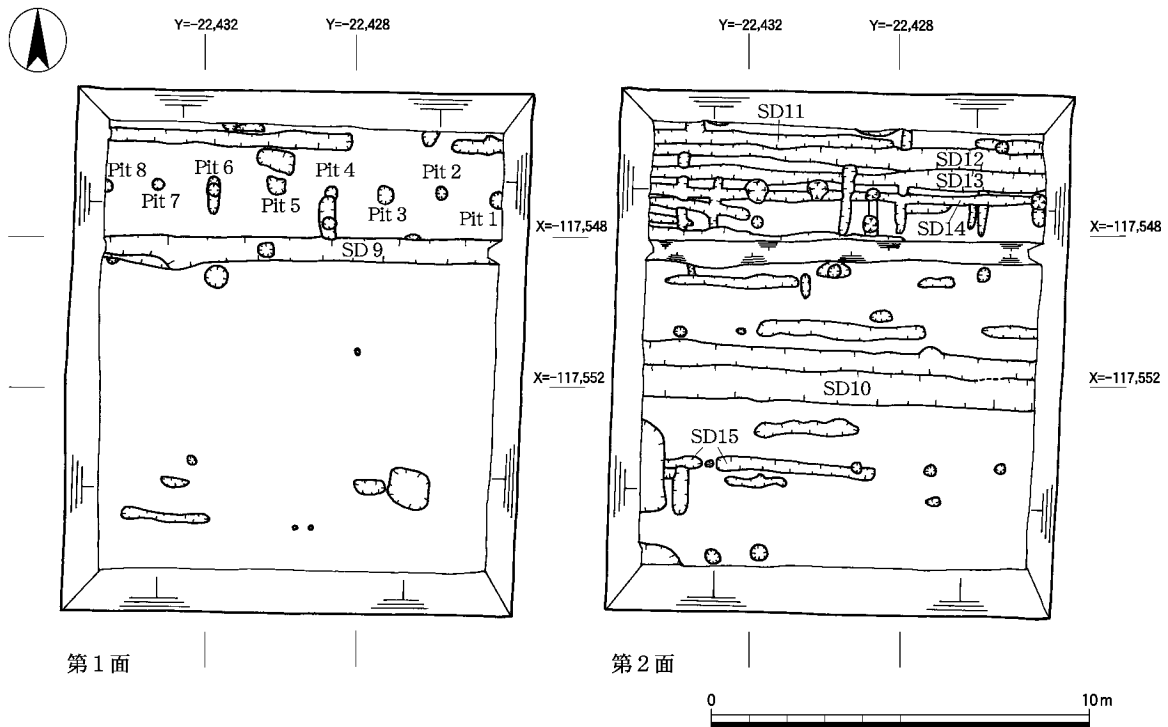


図42 49トレンチ平面図 (1 : 200)

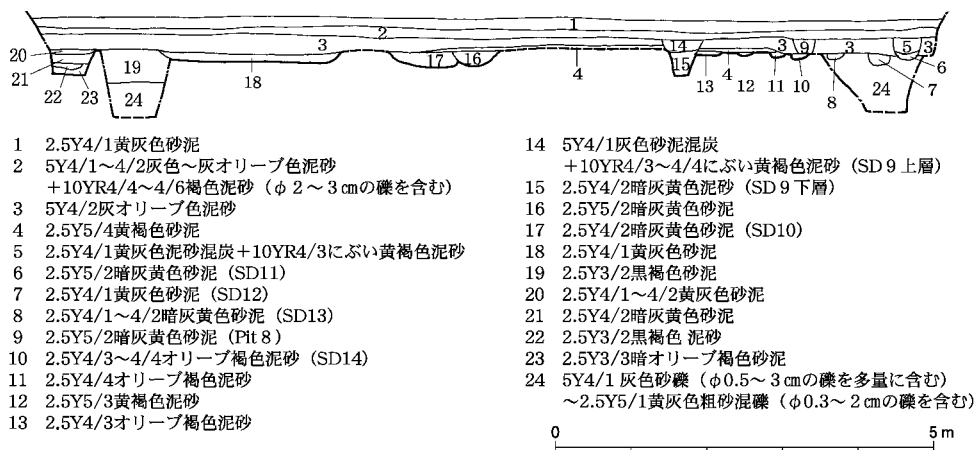


図43 49トレンチ西壁断面図 (1 : 100)

(5) 50トレンチ

50トレンチの基本層序は盛土、2.5Y4/1黄灰色砂泥、2.5Y4/1~4/2灰色~灰オリブ色泥砂+5Y4/2灰オリブ色泥砂、5Y4/2灰オリブ泥砂、5Y4/1~4/2灰オリブ色砂泥、5Y4/1~4/2灰オリブ色泥砂、7.5Y4/1灰色細砂+10YR4/3にぶい黄褐色砂礫となっている。中世の遺構は灰オリブ泥砂層(第1面)で成立し、平安時代の遺構は灰オリブ色砂泥層(第2面)で成立している。

第1面で検出した遺構には、SD 1・2、SK 3、柱穴などがある。SD 1は東壁際で西肩部を検出した。この遺構は調査区内を南北に縦断している。SD 2は調査区内中央やや南寄りで見出した。この遺構は調査区内を東西に横断する遺構である。遺構の東でSD 1と接している。SD 1・2は敷地を区画する施設と推定している。SK 3は南壁際で北半部を見出した。南半部は調査区外へ展開しているとみられる。

SD 2からは須恵器壺底部（図46 - 11）が出土している。9世紀後半頃のものである。SK 3からは黒色土器甕Aタイプ（12）が出土している。9世紀末～10世紀に属する。他に黒色土器椀Bタイプ（13）も出土している。9世紀頃の遺物であろう。小片ながら緑釉陶器椀（14）が出土している。9世紀に属するものである。

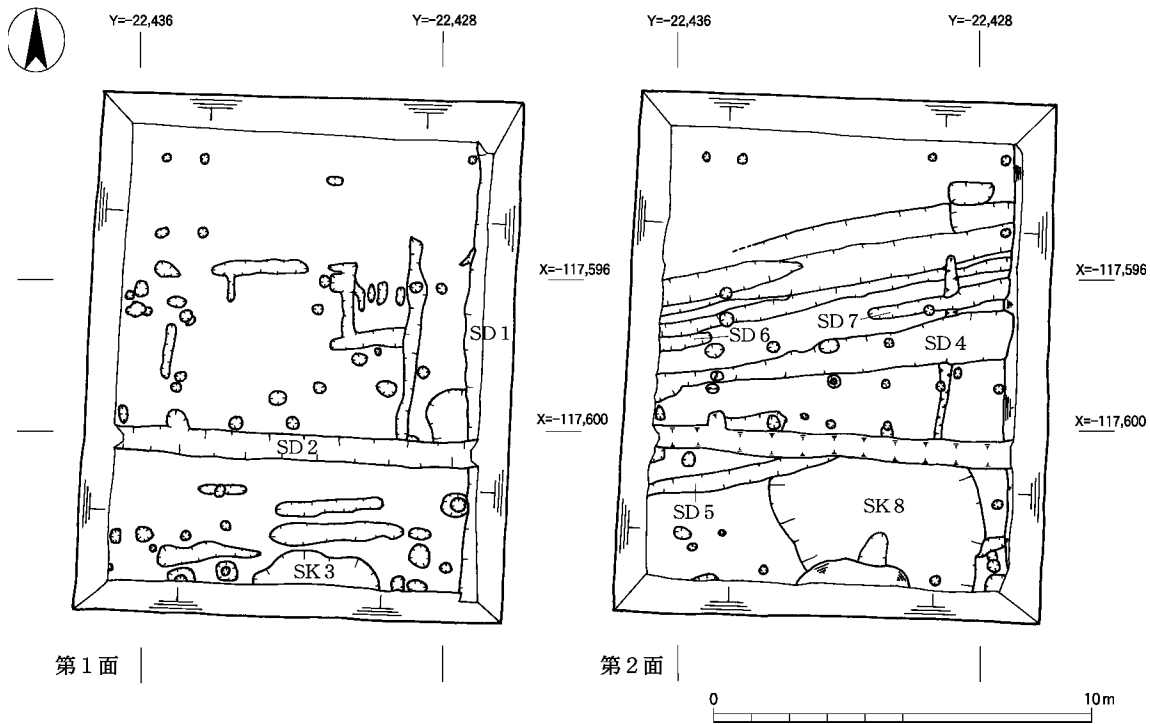
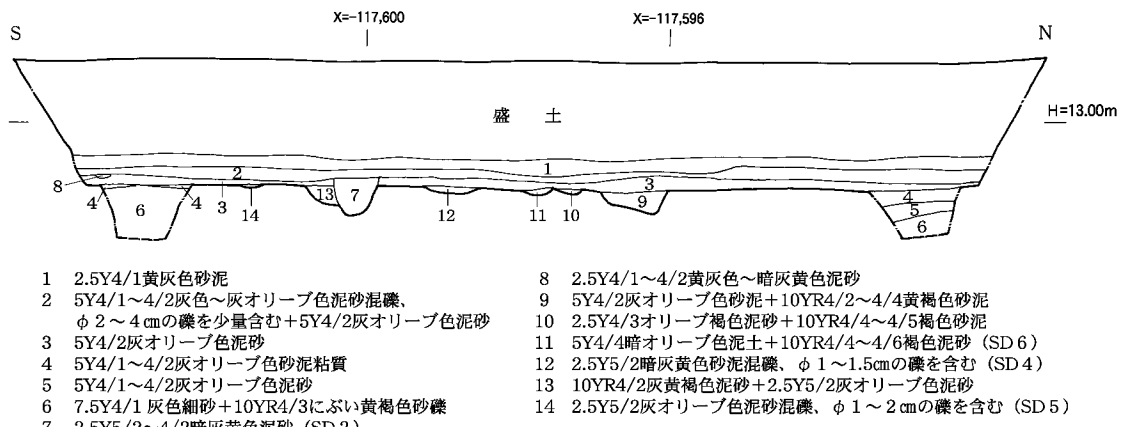


図44 50トレンチ平面図（1：200）



- | | |
|---|--|
| 1 2.5Y4/1黄灰色砂泥 | 8 2.5Y4/1～4/2黄灰色～暗黄灰色泥砂 |
| 2 5Y4/1～4/2灰色～灰オリーブ色泥砂混雑、
φ 2～4 cmの礫を少量含む+5Y4/2オリーブ色泥砂 | 9 5Y4/2灰オリーブ色砂泥+10YR4/2～4/4黄褐色砂泥 |
| 3 5Y4/2灰オリーブ色泥砂 | 10 2.5Y4/3オリーブ褐色泥砂+10YR4/4～4/5褐色砂泥 |
| 4 5Y4/1～4/2灰オリーブ色砂泥粘質 | 11 5Y4/4暗オリーブ色泥土+10YR4/4～4/6褐色泥砂 (SD 6) |
| 5 5Y4/1～4/2灰オリーブ色泥砂 | 12 2.5Y5/2暗灰黄色砂泥混雑、φ 1～1.5cmの礫を含む (SD 4) |
| 6 7.5Y4/1 灰色細砂+10YR4/3にぶい黄褐色砂礫 | 13 10YR4/2灰黄褐色泥砂+2.5Y5/2灰オリーブ色泥砂 |
| 7 2.5Y5/2～4/0暗灰黄色泥砂 (SD 2) | 14 2.5Y5/2灰オリーブ色泥砂混雑、φ 1～2cmの礫を含む (SD 5) |

図45 50トレンチ西壁断面図（1：100）

第2面で検出した遺構は、SD4～7、SK8、柱穴などである。SD4は調査区内のほぼ中央を東西に横断する遺構である。SD5はSD2に切られて中断している。これらの溝状遺構の用途・性格は明らかでない。SK8は調査区南半部で検出した。この遺構はSD2・5に切られて北肩部は確認できない。また南肩部は調査区外へと展開している。

SD6からは滑石製品(15)が出土している。小片なので断定できないが温石と考えている。SD4からは8世紀に属するとみられる鉢形の土師器(19)が出土している。SD5からは9世紀の緑釉陶器椀(16)が出土している。他に13世紀に属する輸入青磁椀(17)が出土している。混入品とみている。SD7からは石帯(18)が出土している。

SK8からは土師器や須恵器などが出土している(20～28)。土師器杯(20～25)は9世紀から10世紀に属する遺物である。また12世紀とみられる遺物(26)も出土しているが、混入遺物と考えられる。杯の他には9世紀に属する甕(27)が出土している。他に9世紀とみられる須恵器短頸壺(28)が出土している。

今調査地での遺物出土の傾向を述べると、平安時代以前の遺物は新しい時期の遺物包含層に含まれるにとどまっており、量はごく少量である。平安時代以降では8世紀から12世紀の遺物が溝状遺構、柱穴、土壇などの各遺構から出土している。その内容は土師器、須恵器、黒色土器、瓦

表5 第5工区遺構概要表

時代	遺 構				
	No46トレンチ	No47トレンチ	No48トレンチ	No49トレンチ	No50トレンチ
平安時代	SK1	SK1、Pit2、SD3・4	SD1～6、SK7	SD10～15	SD4～7、SK8
鎌倉時代 ～室町時代				Pit1～8、SD9	SD1・2、SK3
安土桃山時代以降	SD2				

表6 第5工区遺物概要表

時代	内 容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
平安時代前期	土師器、黒色土器、須恵器、緑釉陶器、石帯	4箱	土師器10点、黒色土器4点、須恵器2点、緑釉陶器2点、石帯1点	1箱	2箱
平安時代中期	土師器、黒色土器		土師器3点、黒色土器1点		
平安時代後期	土師器、瓦器、滑石製品		土師器1点、瓦器1点、滑石製品1点		
鎌倉時代～室町時代	土師器、須恵器、瓦器、焼締陶器、磁器	6箱	青磁1点	1箱	5箱
安土桃山時代	軒丸瓦		軒丸瓦1点		
江戸時代以降	土師器、陶磁器、瓦類	10箱		0箱	10箱
計		20箱	28点(1箱)	2箱	17箱

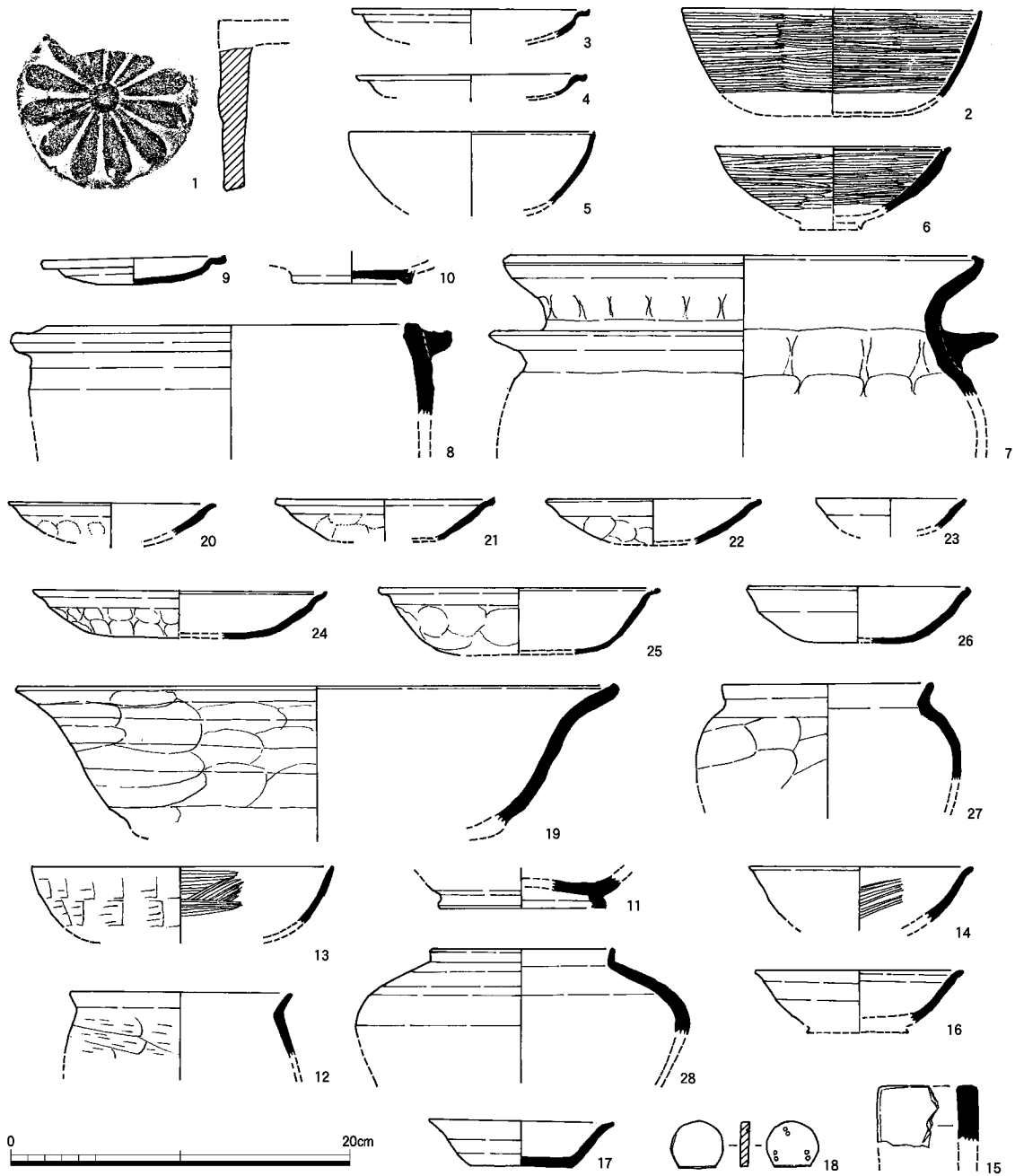


図46 第5工区出土遺物実測図(1:4) 46トレンチ:1、47トレンチ:2~5、
48トレンチ6・7、49トレンチ:8~10、50トレンチ:11~28



図47 46トレンチ出土軒丸瓦

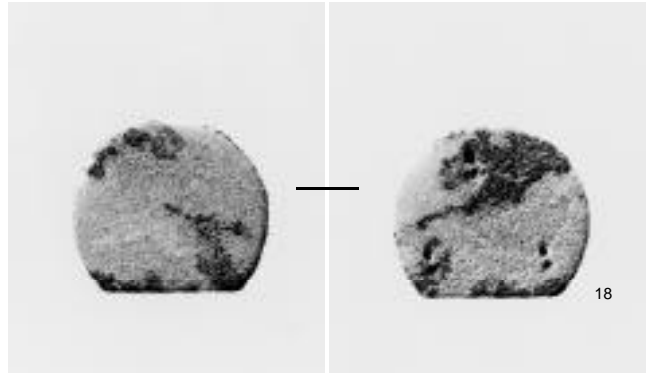


図48 50トレンチ出土石帯

器椀などの日常生活用器が主体をなしている。また、緑釉陶器も少量ながらみられる。鎌倉時代から室町時代に属する遺物でもこの傾向は同様である。土師器、須恵器、ごく少量の輸入陶磁器の椀、瓦器椀などが出土している。近世以降の遺物は包含層からの出土がみられるものの、その出土量は少ない。

3.まとめ

本調査は下鳥羽遺跡の調査であることから、弥生時代から古墳時代の遺跡を調査することを主目的にあげた。調査地は遺跡範囲の西端にあたり、関連する遺構の検出に努めたが、遺構を検出することはできなかった。出土した遺物のなかに古墳時代に属する須恵器片が認められるが、遺構に伴うものではなかった。これらのことから、当調査地内では下鳥羽遺跡の遺構は存在していなかったとみられる。下鳥羽遺跡の中心は当調査地よりも西にあり、既調査地周辺と考えられる。しかしながら、平安時代、中世の遺構を検出したことは大きな成果であった。本調査で平安時代の遺構が成立している標高は12.0mである。昭和61年度調査で検出した弥生時代から古墳時代の遺構も標高12.0mである。このことは、当調査地の開発が平安時代前期より始まり、平安時代後期、中世に渡って人々の生活が営まれてきたことを窺わせる。その後、近世の遺物の出土量の減少にみられるように、漸次衰退していき江戸時代には耕作地となった。また、そのことは絵図史料でもみることができる。耕作地を維持していた人々は、周辺に居住地を定め集落を形成し生活していた。こうした状況は、油小路通がこの地に開通するまで大きく変わることはなかった。

参考文献

- 辻 裕司・磯部 勝『下鳥羽遺跡発掘調査概報』昭和62年度 京都市文化観光局 1988年
- 前田義明・磯部 勝「下鳥羽遺跡」『昭和62年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1991年
- 「元禄十四年実測大絵図」『慶長 昭和 京都地図集成 - 1611 (慶長16) 年 ~ 1940 (昭和15) 年 - 』柏書房 1994年
- 小牧実繁編『城南 - 鳥羽離宮址を中心とする - 』城南宮 1967年
- 京都市編「第一章 古代の曙光 第二節 農業の展開」『京都の歴史 第一巻 平安の新京』學藝書林 1970年
- 京都市編『史料 京都の歴史 第2巻 考古』平凡社 1983年

圖 版

報 告 書 抄 録

ふりがな	とばりきゅうあと・しもとばいせき							
書名	鳥羽離宮跡・下鳥羽遺跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報							
シリーズ番号	2001-8							
編集者名	尾藤徳行・吉村正親・南出俊彦							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2002年11月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
とばりきゅうあと 鳥羽離宮跡 (145次調査)	きょうとしふしみく 京都市伏見区 たけだまはたきちょう 竹田真幡木町 ほか 他	26100	1059	34度 57分 07秒	135度 45分 18秒	2001年10月 4日～2001 年12月3日	277m ²	高速道路 建設
とばりきゅうあと 鳥羽離宮跡 (146次調査)	きょうとしふしみく 京都市伏見区 たけだじょうぼだいん 竹田浄菩提院 ちょうほか 町他	26100	1059	34度 56分 49秒	135度 45分 17秒	2001年8月 3日～2001 年11月28日	984m ²	高速道路 建設
しもとばいせき 下鳥羽遺跡	きょうとしふしみく 京都市伏見区 しもとばひがしせりかわ 下鳥羽東芹川 ちょうほか 町他	26100	1062	34度 56分 26秒	135度 45分 16秒	2001年8月 6日～2001 年11月17日	806m ²	高速道路 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
鳥羽離宮跡 (145次調査)	宮殿跡	鎌倉時代 ～室町時代	溝・湿地状堆積	土師器・瓦器・青磁・ 柿経 弥生時代（石器）				
鳥羽離宮跡 (146次調査)	宮殿跡	平安時代後期 ～鎌倉時代	石敷き地業・池・ 溝・土壙	土師器・瓦器・灰釉陶 器・軒丸瓦・軒平瓦・ 丸瓦・平瓦・鬼瓦		鳥羽離宮跡の堂塔 の石敷き地業		
下鳥羽遺跡	集落跡	平安時代前期 ～後期	柱穴・溝・土壙	土師器・須恵器・黒色 土器・緑釉陶器・石帯				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2001-8

鳥羽離宮跡・下鳥羽遺跡

発行日 2002年11月30日

編集発行 財団法人京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 075-256-0961